

研究資料

## バスケットボールのコーチングについて哲学する： 山口大輔氏との対話から「問い」を生成する試み

高尾尚平<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 日本体育大学

### Philosophizing on Coaching of basketball: An Attempt to Generate a Question from Dialoging with D. Yamaguchi

Shohei Takao

**Abstract:** A Japanese term “コーチング哲学”, which is combined “philosophy” with “coaching”, has two connotations. One is “coaching philosophy”, the other is “philosophy of coaching”. The former implies the principles that coaches cogitate on and embody in the coaching practices. The latter implies the academic work that inquire upon the nature and purposes of coaching. I consider that both of them is significant forms of “コーチング哲学”. On top of that, this paper suggests to add a practice of “philosophizing on coaching in dialogue” to connotation of “コーチング哲学”. The “philosophizing on coaching in dialogue” is the practices of dialogue that try to generate a question itself, not to stipulate the answer having a single meaning. The reasons why this paper suggests the “philosophizing on coaching in dialogue” are because (1) the implications of “philosophy” include “to philosophize” in essence, and (2) the practices of dialogue are indispensable part of “philosophizing”. Above all, it is important for the projects to dialogue with persons who belong with outside academia. This is because dialoging with the persons enables to discover a practical question, and doing so, we can prevent diverse questions of coaching are shut into inside academism. This paper, based on abovementioned standpoints, tried to generate a question of coaching especially related basketball. In the project, I dialogued with D. Yamaguchi, who has experience of working in San Antonio Spurs as athletic trainer. This paper didn't analyze the dialogue based on academic manners, because analyzing based on the academic manners has possibility that overlooks non-academic matters considered in academic paradigms. I therefore described the dialogue as it was, and finally presented a few questions, e.g. of relationship between developing self-awareness and self-expression and training, of the nature of trust and hospitality as gift in coaching, and of relationship between economy and coaching, arose from the dialogue.

**抄録:**日本語の「コーチング哲学」には、大別して、2つの含意がある。1つは、“coaching philosophy”であり、もう1つは、“philosophy of coaching”である。前者は、コーチングにおいてコーチが思索し体現すべき指針を意味する。後者は、コーチングの本質や目的を学問的に考究する営為を意味する。筆者は、いずれも、有意義な「コーチング哲学」のかたちであると考え、そのうえで、本稿では、「コーチング哲学」の含意に“philosophizing on coaching in dialogue”を追加することを提案する。この“philosophizing on coaching in dialogue”は、一義的な「答え」を規定するものではなく、対話から「問い」を生成しようとする実践を意味する。本稿が“philosophizing on coaching in dialogue”を提案する理由は、(1)「哲学」の含意には、「哲学すること」が含まれているからであり、(2)「哲学すること」においては、対話の実践が不可欠であるからである。とりわけ、筆者は、学問の外部の人びとの対話が重要であると考え、学問の外部の人びとと対話することは、コーチングに関する「問い」を学問の内部に閉じ込めることなく、実践的な「問い」を発見することへ繋がらうからである。以上の問題意識にもとづき、本稿では、対話からバスケットボールのコーチングに関する「問い」を生成することを試みる。本稿では、サンアントニオ・スパースでアスレチックトレーナーとして働いた経験を有する山口大輔氏と対話した。なお、本稿では、学術的方法にもとづき対話の消息を分析するということはない。学術的方法にもとづく分析は、学問的パラダイムにおいて非学術的と見做されることがらを見落としてしまう恐れがあるからである。本稿では、対話をありのまま記述し、最終的に、対話から生じたいくつかの問い——たとえば、自己理解・自己表現とトレーニングとの関係に関する問いやコーチングにおける贈与としての「信頼」や「ホスピタリティ」の本質に関する問い、および「エコノミー」とコーチングの関係に関する問い——を提示した。

(Received: 7 October, 2021 Accepted: 23 December 2021)

**Keywords:** Coaching Philosophy, Philosophy of Coaching, Philosophizing on Coaching in Dialogue, San Antonio Spurs, Gregg Popovich  
 キーワード: コーチング哲学, コーチング哲学, コーチング哲学, サンアントニオ・スパース, グレグ・ポポヴィッチ

## 1. はじめに

### 1.1 「コーチング哲学」の再解釈：哲学することと対話について

本稿は、バスケットボールのコーチングについて哲学するものである。但し、本稿の試みは、コーチングに関する一般理論や一義的な概念を導出するものではない。あるいは、ある哲学者の思想を読解し、それをコーチング論に援用しようとするものでもない。本稿は、対話からコーチングに関する「問い」<sup>1)</sup>を生成する試みである。本稿の立場の背景には、「コーチング哲学」に対する問いなおが含まれている。

一般に、「コーチング哲学」という言葉は、コーチングの本質や善さの探究にかかわるものと解される。もっとも、「コーチング哲学」の含意は、それを“coaching philosophy”をとらえるのか“philosophy of coaching”をとらえるのかによって異なる。本稿の問題意識を共有するための出発点として、まずは、“coaching philosophy”と“philosophy of coaching”の含意を確認しておく。

コーチング哲学を“coaching philosophy”をとらえる立場は、“coaching philosophy”をコーチング実践における指針として位置づける。たとえば、佐良土(2018, p. 556)は、「アスリートやチームの卓越性を向上させ、その卓越性を発揮させるコーチング実践において、(a)さまざまな原理として目指される目的、(b)コーチに方向性を与える基本的方針、(c)コーチによって設定される価値観についての包括的な言明」がコーチング哲学(coaching philosophy)であると規定する。この引用からわかるとおり、コーチング哲学(coaching philosophy)は、コーチングの実践と密接にかかわる概念である。佐良土(2018, p. 558)は、上記の規定にもとづき、コーチがコーチング哲学(coaching philosophy)を持つことの意義を次のように論じる。「各自がしかなるべきコーチング哲学を持つことで、そのコーチにとっては精神面でも安定性を獲得することができ、さらに、アスリートや他のコーチたちに対して自らのコーチング哲学を明確に表明し、伝えることで目指すべき姿がはっきりして一貫性を持ってコーチングにあたることができるだろう」。概して、「コーチング哲学(coaching philosophy)」は、コーチング実践に一貫性や安定性をもたらすものとされており、その意味で、個々の指導者が持つべきものとされている。

一方、コーチング哲学を“philosophy of coaching”をとらえる立場は、コーチング実践を対象的にとらえ、コーチングの本質や目的そのものを考究する学問的営為を“philosophy of coaching”と呼ぶ。ここでは、“coaching philosophy”と“philosophy of coaching”について論じたJ.P. Fry (2015)の議論を参照する。Fry (2015)によると、“philosophy of coaching”は、“coaching philosophy”と同義ではない。“coaching philosophy”は、「コーチングに対して個々人が有する思慮深い考え」(Fly, 2015, p. 383)を意味する。Fry (2015, p. 383)の議論では、“coaching philosophy”が、コーチングの実践にかかわるものとされており、目的-手段の思考(means-end reasoning)に強く結びつけられるものであるとされている。上記の“coaching philosophy”の含意は、それが実践上の概念であるというかぎりにおいて、佐良土(2018)による“coaching philosophy”の規定と共通する。対して、“philosophy of coaching”は、Fry (2015, p. 383)によると、コーチングの実践から一定の距離を取った哲学的思索である。Fry (2015, p. 383)は、「philosophy of coachingは、原初的に、目的-手段の思考に結びつけられる必要がない」と論じており、「*philosophy of coaching*の発展には、哲学的な方法や概念が、コーチングの本質や目的を思考するうえで活用される」と述べている。また、Fry (2015, p. 398)は、“philosophy of coaching”を展開するうえでは、「哲学の諸分野とのむすびつきを作ること」に加え、「自然科学や社会科学の実証的な研究成果を組み入れること」がとりわけ重要になると主張している。Fry (2015)の論考にしたがえば、「コーチング哲学(philosophy of coaching)」とは、個々のコーチが有する“coaching philosophy”と異なり、コーチングを対象的にとらえる学問的営為であるといえるだろう。

このように、一口に「コーチング哲学」といっても、“coaching philosophy”と“philosophy of coaching”では、その言葉の含意が異なっている。前者は、コーチングにおいて個々のコーチが思索し実現すべき指針であり、後者は、コーチングの本質や目的を学問的に考究する営為を指している。もちろん、両者のあいだには、優劣があるわけではないし、一方が哲学的で他方が非哲学的というわけでもない。哲学が広義に「事柄をその根本から本質的に考察する知的探究」(渡邊, 1998, p. 1119)であるとするれば、“coaching philosophy”と“philosophy of coaching”は、いずれも哲学の

範疇に属するはずである。両者の差異は、コーチング実践に対する立場の違いとして理解されるべきであるだろう。

筆者は、上述の理由から、“coaching philosophy”と“philosophy of coaching”のいずれも、有意義な「コーチング哲学」のかたちであると考えたい。だが、筆者は、「コーチング哲学」の含意は、“coaching philosophy”と“philosophy of coaching”のみに限定されるべきではないとも考えている。「哲学」の本質には、生きた対話の実践が含まれているはずだからである。

よく知られるように、わが国が西洋的な意味での“philosophy”を哲学として受容したのは、明治期であったといわれているが（隠岐，2018，pp. 92-93），“philosophy”そのものの起源は、紀元前にまでさかのぼる。紀元前に生きたソクラテスやプラトンは、哲学することにおいて対話の方法を採った。哲学者として知られるソクラテスは、著書を書き残すことなく、人びとと対話した。彼の弟子のプラトンは、著書こそ書き残しているものの、それらは、一般理論や一義的な概念を羅列したのではなく、ソクラテスを主人公とした対話篇であった。

哲学（philosophy）が対話とともにあった歴史は、一種のノスタルジーとして片づけられるべきではない。哲学における対話の必要性をめぐっては、現代でも、いくつかの問題提起がなされているからである。以下では、鷺田（2014, 2015）と東（2020）の主張を参照しつつ、哲学における対話の必要性を確認してゆく。

哲学における対話の必要性に関する主張は、哲学の場が大学や学界などのアカデミックの内部に自閉し、アクチュアルな世界と交渉を持てなくなっているわが国の状況を背景にしている。哲学者の鷺田（2014, p. 141）は、わが国の哲学の状況について次のように指摘する。「アカデミズムの内部での『哲学研究』に身を縮めていったこの国の哲学は、文献を『読むこと』に傾注し、時代を『みる』（視・診・看）ことをなせば放棄してきた」。鷺田（2014, p. 77）によると、「『価値中立性』だとか『没価値性』を標榜する客観主義的な学問理解」や「『基礎学』としての哲学」といった学問観は、哲学の場を実践から遠ざけ、「非実践的な理論の典型」として哲学を位置づけてきたという。こうした洞察のもとづき、鷺田（2014, p. 78）は、現代の哲学においては、「『普遍的な妥当性』が『客観性』に肩代わりされることによって、実践的に普遍的なことがらはその固有の場所を奪われ、主観的・相対的なことがらへと転落させられる」と警鐘を鳴らしている。同種の問題意識は、東（2020）にも見られる。東（2020, p. 7）もまた、哲学が「学者仲間」や「編集者仲間」に閉じられがちな現代的傾向に危惧を表明し、哲学の「場所」を人と人

とのあいだに置きなおすことの重要性を論じている。

以上の問題意識より、鷺田（2014, 2015）と東（2020）は、哲学を対話として実践することの必要性を指摘している。鷺田（2015, p. 20）は、「話すためには、聴かれるだけではなく、みずからも相手の語りに耳を傾けることが必要である」と述べ、「〈聴く〉という行為が、哲学のいとなみとしてなされるためには、ひとびとが話すそのおなじ場所に哲学が場所をもちうるのでもなければならない」と主張する。鷺田（2015, pp. 17-18）の主張は、哲学が「書く」ことに尽力してきた一方で、〈聴く〉という行為に注力してこなかったことへの反省に端を発している。こうしたことから、鷺田（2014, p. 234）は、哲学をダイアログとして位置づけなおすことの必要性を指摘し、哲学における対話の意味を次のように説明する。「哲学的対話がめざすのは、合意ではない。合意よりもむしろ、問題の所在を探ること、問いが書き換えられてゆくプロセスそのものをシェアすることにある」。一連の鷺田（2014, 2015）の指摘は、哲学の場をアカデミック内外の人と人とのあいだに置きなおすことを要請し、哲学における対話の意味を「問い」の更新・生成に求めるものである。このことの次第を「剰余（誤配）」というキーワードから説明したのが東（2020）であるといつてよい。東（2020, p. 195）によれば、対話には、「論理だけではないさまざまな物語」が剰余として付随しており、議論の発展には、「それらがきちんと衝突する場をつくるのが大切」であるという。こうした剰余性（非論理性）への配慮は、一般性や一義性を規定しようとする思考のスタイルとは対極をなすものであるだろう。だが、東（2020）にいわせれば、この点にこそ哲学の役割がある。哲学は、対話から剰余を産出することで、「『いまこの正しさ』から逃れる」（東，2020, p. 214）ことを可能するからである。東（2020, p. 214）にとって哲学とは、対話において生じる剰余に身を開き、即自的な「正しさ」や「合理性」から超越することなのである。

鷺田（2014, 2015）や東（2020）による哲学の理解は、実のところ、わが国に固有の考えでも、近年に突如登場したアイデアでもない。哲学者のK. ヤスパース（1954, pp. 36-37 〈1971, S.23〉）もまた、人と人との実践的な交わりを哲学の根源に据えている。ヤスパース（1954, p. 16 〈1971, S. 13〉）は、哲学の本質について次のように論じる。「哲学の本質は、真理を所有することではなくて、真理を探究することなのであります。哲学とは、途上にあることを意味します。哲学の問いはその答えよりもいっそう重要であり、またあらゆる答えは新しい問いとなるのであります」。ヤスパース（1954 〈1971〉）にとって哲学は、ゆるぎない信念や価値観を持つことではなく、他者との交わりにおける真

理探究の過程——すなわち、「問い」の更新の過程——にあることを意味する。ヤスパース (1954 (1971)) の言表に示されているのは、「哲学すること (Philosophieren)」(ヤスパース, 1954, p. 36 (1971, S. 23)) としての哲学の内実である。

以上の議論からは、「哲学すること (Philosophieren)」としての哲学の含意や、その実践としての対話の意味が浮かびあがってくる。哲学の役割は、理論や概念を一義的に規定することのみあるのではない。また、哲学の場は、大学や学界に閉じ込められるべきではない。哲学は、人と人とのあいだに場所を持つ。哲学には、対話から「問い」そのものを生成してゆく役割がある。片岡 (1987, p. 21) の言葉を借りれば、「哲学とは思索と対話の実技」なのである。

哲学の意味を「哲学すること (Philosophieren)」ととらえるなら、「コーチング哲学」の含意もおおのずと拡張されてくだろう。すなわち、哲学を「哲学すること (Philosophieren)」と解することで、“philosophizing on coaching in dialogue”とでもいうべき「コーチング哲学」の理解が可能となる。“philosophizing on coaching in dialogue”としての「コーチング哲学」は、その実践において、“coaching philosophy”と“philosophy of coaching”とは異なる。“coaching philosophy”では、哲学は、個々のコーチが「持つべきもの」とされていた。だが、“philosophizing on coaching in dialogue”の立場では、哲学は、人と人とのあいだで「なされるもの」である。それは、一義的な「答え」を規定するものではなく、「問い」を発見したり更新したりする途上そのものを意味する。また、“philosophy of coaching”は、学問の立場からコーチング実践を考察するものであったが、“philosophizing on coaching in dialogue”は、学問と実践との垣根を超えてゆく。“philosophizing on coaching in dialogue”が重視するのは、「客観性」や「一般性」などという観念ではない。“philosophizing on coaching in dialogue”は、さまざまな経験や価値観を有する人間が、そのバックボーンを背負って対話し、対話者への応答を迫られながら思考を更新してゆくプロセスを重視する。“philosophizing on coaching in dialogue”として「コーチング哲学」を再解釈することは、既存の「コーチング哲学 (coaching philosophy, philosophy of coaching)」とは異なる出発点からコーチングについて哲学する途を用意しうる。

## 1.2 本稿の目的と方法

そこで本稿では、対話からコーチングに関する「問い」を生成することを試みる。この試みにおいては、「○○の問いを導きだす」といった明確なゴールはな

い。「問い」そのものの生成がねらいであるのだから、明確なゴールをあらかじめ定めることは不可能なことである。したがって、本稿の実質的な目的は、対話の実践そのものにあり、且つ、その対話の消息をありのままに記述することにあるといえるだろう。

本稿では、山口大輔氏 (現40歳) との対話を試みる。山口大輔氏は、2007年から2014年にかけて、NBA (National Basketball Association) のサンアントニオ・スパーズ (以下、スパーズ) でアスレティックトレーナーを務めた人物である<sup>2)</sup>。アスレティックトレーナーとして山口氏は、NBAでキャリアを積んだのみならず、NBAでの優勝 (2013–2014シーズン) を経験している。現在 (2021年8月) は、東京医科歯科大学に特任助教として在籍し、アスリートのパーソナルトレーニングなどに従事するかたわら、クリニックをとおして日本の子どもたちとかかわっている。筆者が山口氏との対話を希望した理由は、まず以って、上記のキャリアにある。

山口氏との対話を希望した2つ目の理由は、グレッグ・チャールズ・ポポヴィッチ (Gregg Charles Popovich; 以下、ポポヴィッチ) のコーチングやスパーズのチーム文化について知ることにある。これまでスパーズは、NBAで5度の優勝成績 (1999, 2003, 2005, 2007, 2014) を取っている。ポポヴィッチは、この優勝のすべてにヘッドコーチとして携わっている。ポポヴィッチがヘッドコーチに就任したのは、1996年のことであつたから、上記の戦績は、華々しいものであつたといわねばならない。だが、そうした戦績以上に、ポポヴィッチは優れたコーチであるともいわれる。とりわけ、ポポヴィッチの優秀さは、彼の人柄やチーム強化のしかたにあるといわれる。ポポヴィッチは、いわゆるスーパースターを寄せ集めて勝利を重ねてきたのではない。スパーズの主軸を務めた選手は、ドラフトの上位指名ではなかった。また、ドラフト外の選手を主力選手にまで引きあげることも数多くあつた。選手のみならず、ポポヴィッチとともにスタッフを務めたコーチのなかには、のちに他チームでヘッドコーチを務め、優秀な成績を取っている者もいる (Geoffreys, 2020, pp. 6–11)。ポポヴィッチのコーチングには、戦績だけではないなにかが隠されているように思える。しかし、彼自身が著書を書いていないことなどもあり、彼のコーチングの実質は、わが国ではあまり知られていない。ネットニュースなどで取りあげられることもあるが、やはりそれは断片的なものにとどまる。こうした事情に鑑みると、ポポヴィッチのコーチングを間近で体感し、ポポヴィッチとともにチームを支えてきた山口氏との対話は、ポポヴィッチのコーチングスタイルやスパーズのチーム文化を知るうえで有効と

なるだろう。

山口氏との対話を希望した理由は、それだけではない。山口氏その人の考えかたに興味を持ったことも、彼との対話を望む理由である。筆者は、かねてより山口氏と交流があった。頻繁に会ったり飲み交わしたりするような間柄ではなかったが、会った際には、NBA やスポーツについて語り合っていた。また、日本のバスケットボール現場に対する違和感も山口氏より伺っていた。そうしているうちに、筆者は、山口氏とともにバスケットボールのコーチングについて問い深めてみたいと思うようになった。それと同時に、山口氏と筆者との対話そのものを共有したいとも考えるようになった。山口氏は、日本人としてNBAの世界を経験し、翻って日本のスポーツのありかたにも関心を持っている。彼は、いわゆる「コーチング哲学」の研究者ではないが、彼の言葉には、コーチングを考えるためのヒントが刻み込まれている印象を受ける。筆者はというと、コーチングにおける暴力に関する哲学的研究に従事してきたかわら、ささやかながら、8年間にわたり高等学校のバスケットボール部で指導に携わった経験を持つ。山口氏と筆者のバックボーンは明らかに異なるが、それらを交わらせたときに、どのような「問い」が生まれてくるのかを実験してみたくなったのである。

上記の理由から、本稿では、山口氏と対話を試み、その消息を記述してゆく。とりわけ、山口氏と筆者との共通点がバスケットボールにあったことや筆者の関心がポポヴィッチのコーチングにあったことから、本稿の対話の基軸は、バスケットボールのコーチングに定める。本稿のタイトルが「バスケットボールのコーチングについて哲学する」となっているのはこのためである。このことは、但し、本稿における対話の論点が「バスケットボールの」コーチングに限定されることを意味しない。本稿は、対話のなりゆきに応じて、コーチング一般の論点に移行したり、脇道にそれたりすることを期している。むしろ、理論的にはつながらないような論点や一見すると飛躍に思えるような議論の推移が、「問い」の発見や更新においては重要である。本稿では、こうした剰余性を最大限に尊重したい<sup>3)</sup>。

### 1.3 本稿の位置づけ

本稿の位置づけは、「原著論文」ではない。このことは、本稿の目的と方法からして明らかである。本稿の成果は、「研究資料」として位置づけられるべきであると考えられる。

一般に、原著論文の場合には、当該分野の理論的パラダイムにもとづき、オリジナル且つ一義的な結論を導出することが求められる。理論的パラダイムとは、

「『何をいかに探究すべきか』を規制する、科学者共同体の〈共通規範〉」である(野家, 2013, p. 64)。原著論文では、個人の主観のみに依拠して結論が導かれることはない。概念の使用やデータの集積、およびそれらの解釈のしかたにおいて、一定の規範にもとづく必要がある。

このことを裏側からとらえ返せば、原著論文の範疇からは、学問の理論的パラダイムの外部にあるものは取り除かれるということでもある。原著論文は、分析や考察の枠組みを厳格に設定することで一定の客観性を獲得しうる。だが、それにより、分析や考察の枠組みの外部にあるものは、それらの射程から排除される。このことは、原著論文の必然であるが、コーチングひいてはスポーツといった実践を対象とする学問は、上述の原著論文の限界に自覚的であるべきだろう。なぜなら、原著論文の限界を看過するとき、コーチングやスポーツに関する「問い」の射程が学問の内部に閉じられてしまうからである。

上記に鑑みると、「コーチング哲学」は、「原著論文」とは別のルートも用意しておく必要があるだろう。つまり、学問の理論的パラダイムの外部へ「問い」の始原を開くためのルートを確保するのである。本稿が“philosophizing on coaching in dialogue”を標榜する理由は、この点にもかかわっている。研究者が研究室や実験室に閉じこもり、文献やデータに向き合うことはもちろん重要である。だが、それだけでは、「問い」の射程が既存の学問のパラダイムに閉じられてしまう恐れがある。コーチングやスポーツを研究するには、研究者が大学や学界の外部へ赴き、「問い」の始原を探し求める実践が肝要である<sup>4)</sup>。本稿は、このことを期した研究実践である。

したがって、本稿は、「原著論文」として位置づけられるべきではない。本稿は、学問の理論的パラダイムの外部へ抜けだすことを積極的に志向する。この志向は、もちろん、学問との断絶を望むものではない。本稿は、実践者との対話から立ちあがる「問い」が学問としての「コーチング哲学 (philosophy of coaching)」へ接続されることを期している。また、筆者は、本稿の内容が現場のコーチの「コーチング哲学 (coaching philosophy)」を進化・深化させるための一助になることも期待している。本稿は、コーチングに関する一般理論や一義的な概念を導出するものではないにしても、「コーチング哲学 (coaching philosophy, philosophy of coaching)」に「問い」の出発点を留意しうるものとして位置づけられる<sup>5)</sup>。

### 1.4 本稿の手続きについて

すでに述べたとおり、本稿では、山口大輔氏と筆者

が対話を行い、その様子を記述する。対話の記述にあたっては、分析や理論化は行わない。分析や理論化を行ってしまうと、対話に含まれる剰余性が学問的パラダイムや筆者の主観に収斂されてしまうからである。以下の対話の記述にあたっては、山口氏との対話の消息をありのままに記述する。なお、固有名や具体的な出来事の記述に際して、とりわけ説明が必要と思われる箇所については、筆者が注釈を付している。また、筆者の発言において、特定の先行研究が念頭にある箇所については、その出典を記載している。このことのねらいは、学問の知と対話内容との接点を示唆しておくことにある。

対話は、2021年8月17日(火)に東京医科歯科大学のフィットネスルームで行われた。このフィットネスルームは、筆者と山口氏が出会った場所であり、かねてより議論を交わしていた場所である。対話の様子は、ボイスレコーダーに録音し、筆者がその文字起こしを行った。本対話は、日本体育大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号:021-H117)を得て行った。山口氏には、事前に研究の趣旨を説明し、同意書にサインをしていただいた。研究趣旨の説明では、山口氏の固有名を開示することや対話の主題をあらかじめ伝えた。事前に説明した対話の主題は、①山口大輔氏がスパーズで働き始めるまでの経緯、②スパーズにおけるコーチングについて、③日本のバスケットボール現場について思うこと、の3点であった。この3つの論題に対応し、以下の対話の記述では3つの節を設けた。但し、対話の内実は、3つの論題に収まりきらないものであったことを断っておく。次章における節の区分は、あくまで形式的なものである。文字起こしした原稿については、山口氏に確認を依頼し、山口氏や特定の個人の不利益となりうる記述に関しては、適宜修正を行った。

最終的に、本稿では、対話から生じたいくつかの「問い」を提示している(「3.おわりに」)。それらの「問い」は、筆者の主観——そこには、これまで筆者が学問から学んできた知識も含まれる——と山口氏の語りとの偏差から生成されたものである。当然ながら、筆者が知っていること(既知)は、「問い」の対象になりえない。既知を問うことは、原理的に不可能だからであり、問うことが可能な知はすでに既知ではないからである。とはいえ、まったくの無知からも、「問い」は生じえない。われわれは、まったく知らないことに関しては、問うことはできず、ただ吸収することができるのみである。「問い」が可能となるためには、ある程度のことを知りつつも、それが「ある程度のこと」でしかなかったことを自らに自覚させる——すなわち、不知を自覚させる——他者の言表が不可欠であ

る。なぜなら、自らの既知と他者の言表とのあいだになんらかの差異が生じることで、はじめて、その差異に存する不知の領域に「問い」が生起しうるからである<sup>6)</sup>。ゆえに、本稿の最後で示される「問い」は、山口氏との対話から筆者が不知を自覚したいくつかの論点である。

もっとも、本稿の最後で示される「問い」や対話の内容に対しては、その整合性や妥当性に対して疑義が投げかけられる可能性もありうる。本稿は、そうした疑義を積極的に尊重する。なぜなら、本稿に対して示される疑義もまた、一種の「問い」にほかならないからである。本稿が「『問い』を生成すること」を目的とするとき、「問い」の主体は、筆者でも読者でもありうるのである。本稿の内容は、それ自体として完結するものではなく、今後のコーチング哲学(coaching philosophy, philosophy of coaching)へ新たな「問い」を提供しようとするものである。

## 2. 山口大輔氏との対話

### 2.1 サンアントニオ・スパーズで働くまでの経緯

筆者：まずは、サンアントニオ・スパーズ(以下、スパーズ)で働くことになった経緯を教えてください。

山口氏：アメリカに行くところからだよ。

筆者：はい。

山口氏：小さい頃からスラムダンクとマイケル・ジョーダンの影響でNBAを見ていて、バスケットボールが好きになったんだよ。で、中学生の頃に、自分の中学校の隣にインターナショナルスクールがあって、そこにニューヨークの中学生10名~15名くらいが交換留学生として来ることになって、その子たちのホストファミリーを探しているという話があるうちの中学校に来たんだよ。母親が中学校の英語教師の免許を持っていたこともあって、実際に先生をしていたわけではないけれど、英語に興味があったから、是非ということで2人受け入れることを決めて、ニューヨークの子たちと1週間毎日一緒に時間を過ごす機会があったのよ。それですごく英語に興味を持つようになったんだ。アメリカにも興味を持つようになって、やっぱり彼らのバスケットボールは日本人のバスケットボールと全然違って、ボールのハンドリングの感じも全然違って、バスケの伸びやかさとか大きさとかがすごくカッコいいって思ったね。でも、それ以上に、やっぱり英語への興味というか、そういうのがより出て、自分でも喋れて

いたイメージがあった。実際に英語が喋れていたかどうかはわからないけど、なにかしらのものが通じて、コミュニケーションを取っていたんだよね、不思議と。だから、「俺英語できるんじゃないか」とか、違う言葉を喋れるのが楽しいとか、カッコいいなって感覚があった。そして、高校ではバスケット部に入って、なんとなくぼんやりとプロ選手なれたらいいとか、NBAでプレーできないかなとか思っていたけど、明らかにプレーヤーとしては無理だなというのわかっていた。それで、大学進学について考え始めたんだよね。で、大学で何を勉強しようって考えたときに、スポーツ科学っていう存在を知った。

筆者：スポーツ科学の存在は、どのようにして知ったのですか。

山口氏：大学の要項がある冊子を見ていて、俺が通っていたのは進学校だったから、ある程度みんなが行くような大学で且つ国立大学行きたいなみたいなのはあったんだよね。そうやって大学を探していたら、たまたま千葉大学が目に入ってきて、そこにスポーツ科学部っていう文言を見つけて、「スポーツ科学部ってなんだ？」ってなって探っていくうちに、それだったら早稲田大学がいいとか筑波大学にも体育専門学群があるということを知って。その頃からの自分の感覚で、その分野の一番のところに行きたいみたいなのがあったから、それで筑波の体育専門学群を受けたのよ。でも、そのときに、試験を受けて、実技試験を3競技受けなきゃいけないくて、加えて、面接と論文があって、それをセンター試験のあとにやらなきゃいけないくて。でも、なんでそこに行きたいのかとかを明確に言葉ではっきりと説明できるものはなかったし、ただただなんとなくスポーツの世界で頑張りたいたいっていう想いしかなかったから、試験で説得させられるものがなかったんだよね。なによりも、スポーツの実技があって、自分は運動ができる人間じゃなかったから、実際に3競技の試験をやってみたときに、どの競技やっても「全国大会出ました」みたいな人ばかりで、まったく敵わないなという印象を受けた。センターの結果は悪くなかったんだけど、案の定落ちたんだよね。で、もう一回やって合格できるのかなとか思いながらも、浪人して、もう一回筑波を受けたんだよね。センターの結果は前回以上に良かったんだけど、結局落

ちたんだよね。そのとき、これきついわと思いつつながら、しかも、「スポーツ（を自分がすることが：筆者註）がダメだからこの分野に行きたいのに、何で実技をやらなくちゃいけないんだろう」という疑問がものすごくあって意味が分からないと思ってたときに、アメリカのことがふと頭に浮かんできて、いまがタイミングなんじゃないかって思ったのよ。それでアメリカの大学の進学を考えて、学費的に行けそうな大学とバスケットボールが結構強そうなところを探してみたら、インディアナ州立大学っていうラリー・バードの出身校が見つかった。しかもちょうどその頃、インディアナ州立大学がNCAAに少し出ている時期で、アリーナも結構しっかりしてて。それで、バスケットもそうだけど、アスレチックトレーニングっていう世界があるらしいというのを知って、そこで学びたいと思って進学したんだよね。向こうで勉強しているうちに、プロの世界に行きたいなって思って。そもそもNBAに行きたいっていう思いがずっとあったから、じゃあどうすれば行けるのかと考え出したときに、一番プロに入りやすかったのがNFL (National Football League) だったのよ。なんでかという、NFLって夏になるとたくさんの学生インターンを募集するんだよね。ロースターに入っていない選手も含め、100人以上のアスリートが夏の期間にサポートしなくちゃいけないキャンプがあるからすごく大変な時期で。そういう事情だから、チームに10人くらいのアスレチックトレーナーのインターンを全チームが募集するから、ちょっと門が広がったのよね。そのときうちの大学があるインディアナにインディアナポリス・コルツっていうNFLのチームが毎年夏のキャンプをしに来ていたから、諸々の縁が繋がって、いろいろな人と話すことができて、うまく繋がって、インターンではないけどボランティアというかたちでコルツに帯同したんだよね。で、その翌年に、(NBAの：筆者註)インディアナ・ペイサーズが学生インターンを募集しているって話がたまたまうちの大学に来て、俺が募集したら、「コルツでプロを見たことあるんだね君、じゃあうちでインターンやってみる？」という話になって、インディアナ・ペイサーズのシーズンインターンを大学生のときに経験させてもらったんだよね。そのインターン

をしているときに、NBAっていう世界を見てみて、自分に欠けているものや自分の知らないことがたくさん見えたから、それを勉強できる大学院を探して進学したんだよね。相変わらずNBAで働く夢はあったから、大学院に通っているうちに、どうやったらNBAで働けるかなって考えていたら、またNFLからインターンの話があって、夏にインターンをやって、そのあいだ、「次の仕事はどこに行こう？でもNBAしか考えられないよな」って思っていて、そのとき、大学院の教授から「(NBAの：筆者註) サンアントニオ・スパーズっていうチームがオースティン・トロズっていうDリーグのチームをちょうど買収したから、アスレティックトレーナーが必要らしい」<sup>7)</sup> っていう話があって、面接に行って、何人か候補がいたんだけど、俺もかなりしつこく電話しながら待っていたら、採用してもらえて、そのときのGMのRC・ビュフォード(以下、RC)の言葉が印象的で、「お前日本人だよな。俺の妻はプロ・ゴルファーでよく日本行ってたんだよ。日本人は凄く勤勉でものすごく頑張り屋っていう印象があるから、君も多分大丈夫だよな」って言われたのよね。それに2007年の当時からスパーズは多国籍チーム<sup>8)</sup> だったから、だから最終的には話を決めてもらえたんだらうね。いろんな縁が重なって。

筆者：そうすると、やはり、アメリカの大学に行って、積極的にインターンなどに参加することや、あるいはアメリカの大学院に行くというプロセスは重要だった気がしますね。人の具体的な繋がりとか作るうえでは。

山口氏：そうね。結局繋がり...でも、ただ誰かを知っているじゃダメなんだけど、繋がったところで自分がどれだけのものを出せるかが大事なわけで、誰かから信頼されないかぎりはダメだね。それは日本も一緒だよな。やっぱ自分の知っている人が信頼できるなら大丈夫だろうとか、会って話したときに「こいついいな」とかが大事。そういう繋がりをどう作れるかが大切だと思う。でも、繋がりを求めて人に出会いには行ってなかったけどね。そのバランスが大事だと思う。ただ、自分も以前ちょっとそういう時期もあったよ。NBAのトレーナーだって人がいたら、「こんにちは」って声をかけて、名刺を交換してみたいなことは何度かあったけど、そこでの関係は

何にもなっていないかな。むしろ、自分のいる場で、目指すところを目指してできるかぎりのことをやっているなかで、だんだん繋がっていった感じだとは思う。エピソードとしては、スポーツ心理学の先生が大学院生に対して、「将来何したい？」って聞いてきて、「自分はNBA行きたいです」って言ったら、すぐに「あなたみたいな日本人が英語もままならない状態でそう簡単にNBAの世界に行けないよ」って感じで妙にきつく当たられたんだけど、自分としては行きたいところはNBAしかないから、その言葉には怯まなかったというか、ただただ自分の夢は、ずっと持ち続けたっていうところは、ものすごく強かったし、それがあったから最終的に行きつけたんだと思う。

筆者：NBAでのキャリアについてももう少しお伺いしたいのですが、まずは、Dリーグでの仕事から始まったということでしたが、そのときの役割としては、アスレティックトレーナーということで間違いないですか。

山口氏：立場としては、サンアントニオ・スパーズが雇ってくれていて、派遣というかたちでオースティン・トロズに行って、Dリーグのオフシーズンのときにスパーズに行くっていう感じ。トロズのときの役職は、アスレティックトレーナー、ストレングスコーチ、トラベルコーディネーター、エクイップメントマネージャーつまり用具係、アパートのコーディネーターとか全部。Dリーグの半年間のシーズンのためだけに選手たちは来るわけで、いまは変わっているけど当時はお金も全然少ないから、アパートをチームが提供するんだよね。そのアパートを用意するのも俺だったし、選手が海外に行ったりNBAにコールアップされたりしていなくなる時には、その部屋を綺麗にして荷物を箱に詰めて送って、次の選手がアパートに入れるように準備することもした。あと、飛行機に乗るときには、飛行機のチケットを取ったり、試合の旅程をつくったり、向こうのバスの運転手とホテルの人と話してっていう仕事もやっていたね。

筆者：かなり役割が多岐にわたっていますね...

山口氏：ほんとに多岐だよ。ほとんど俺だけでそれやっていたからね。コーチ陣はコーチングに特化してたいからね。まあアシスタントコーチが少し手伝ってくれたりしたけどね。ちなみに、そのアシスタントコーチがいまのメン



フィス・グリズリーズのヘッドコーチのテイラー・ジェンキンスだよ。

筆者：ある種の下積みじゃないですけど、ダイスさん<sup>9)</sup>のように、自分の役割以外の仕事をして、そこからトップチームで専門職を担うといようなキャリアは一般的なのでしょうか。

山口氏：なんともいえないけど、色んな人がいるよ。DリーグからNBAにあがる人もいるし、もともと能力を評価されてあがる人もいるし。Dリーグの経験は、4年間だったけど、4年目にはもうこれ以上やれないって感じで。でも、ちょうど4年目のタイミングでスパーズに呼ばれたからよかったよ(笑い)。Dリーグは、アリーナはあったけど、そこに自分たちの荷物とか道具を置いておけなかったから、荷物の出し入れを試合毎にやっていたんだよね。それも大変だったし、飲み物の準備とかテーピングもするし、ユニフォームも洗って乾かして、ほんとうに仕事が多すぎてきつかったよ。けど、やっぱりコミュニケーション能力はものすごく伸びた。アメリカにいる日本人としては、そこがすごく大事。しかも、マイナーリーグだから扱いが適当過ぎて。最初の頃自分は、相手方に予定表を渡して、「この日この時間に行くからバスを手配しておいて」ってお願いすれば十分だと思っていたけど、それを渡したうえで前日に確認の電話を入れて、さらに飛行機に乗る前にも確認の電話をして、乗り継ぎがあればそのタイミングでも連絡を入れるってことをやらないと、現地に到着してバスが30分遅れるとか、もしくは「知らなかった」とか言われることもあるんだよね。そのときのトロズのヘッドコーチがいまのユタ・ジャズのクイン・スナイダーで、彼はもともと大学のヘッドコーチをやっていたから細かい部分にも厳しい人で、かなり鍛えられたね。当時はまだ英語への苦手意識があったから、メールでのやりとりを好んでやっていたけど、「メールで伝えた」と言っても、「メールじゃダメだろ。それじゃ向こうの確認が取れてないだろ」みたいなこともいわれて、「電話しろ」ってなったりもしたよ。やっぱり電話越しの会話は、面と向かっての会話と全然難易度が違って。でも、それ以降は、きちんと電話で解決するようになったよ。まあ、色んなコーチたちを見て、たくさんのことを経験できたのはよかったかな。

筆者：Dリーグからスパーズにコールアップされたきっかけや理由はあったのでしょうか。

山口氏：俺の場合は、スパーズのGMのRCとかかわりが深かったのはある。スパーズの手伝いをしているときには、仕事の合間に、RCから頼まれて彼の身体を見たりとかしていたからね。でも、それはたぶん、RCが「こいつどういうやつだろう」っていうところを探っている部分もあった気がするんだよね。確かに、身体を見たりするなかで、色んな話をしていたんだよね。自分はアメリカの最先端の身体の見方みたいなのを学びに大学院行っていたから、おそらくRCは、俺が話していることを気に入ってくれていたような気がする。そのときは、コミュニケーションの難点とかも克服できはじめていて、RCとクインは仲良かったから、クインを通じて俺の仕事ぶりを聞いていたんだと思う。一番のきっかけは、その当時のスパーズのアスレティックトレーナーがゴールデンステイトに呼ばれて、そのポジションが空いたから、そのタイミングも諸々含めてかな。

筆者：ダイスさんがスパーズでの仕事に主軸を置き始めるまでに、ポボヴィッチ<sup>10)</sup>やスパーズのスタッフ陣とはかかわりがあったのでしょうか。

山口氏：それはあったよ。Dリーグのオフシーズンとかそういう時期は、スパーズのサポートに行っていたし、サマーリーグではスパーズのアシスタントコーチと一緒に仕事していたからね。だから、オースティン・トロズにいるときから全員のコーチ陣とかかわることはあったよ。

著者：スパーズで働き始めた段階で、ダイスさんはいくつになっておられたのでしょうか。

山口氏：26歳かな。

著者：スパーズで働き始めるまでは、生活面は安定していたのでしょうか。

山口氏：やっぱり生活は厳しかったよ。大学と大学院は、親にお金を出してもらっていて、授業料免除の支援も受けていたけど、それでも、年間60万円以上かかっていた。だから、食費は、ルームメイトと一緒に月100ドルに抑えていた(笑い)。向こうだとウォールマートっていう大きなスーパーがあって、チキンレッグが15本くらいで4ドルくらいだったから、それを捌いてひとつずつ冷凍して、それで自炊していたから節約できたね。普通にお腹いっぱいになる量だったし。あと、近所

に毎週火曜日は10セント、だから10円でチキンウィング一本みたいなお店があったのよ。その分お酒を頼まなきゃいけないルールなんだけど、俺らは軽く酒飲んで、1人5ドルくらいでお腹いっぱいになるみたいなこともしていたよ。遊ぶといえば、そのお店だったかな。

著者：生活が安定し始めたのは、どのくらいの時期なのでしょう。

山口氏：NFLのインターンに行っていたときに、月々2000ドル貰えるようになって、しかも住む家も提供されていたし、さらに、白人以外の人が貰えるマイノリティスカラシップという奨学金があったからプラス1000ドルくらい入ってたから、なにもないところからいきなり2500ドルとか3000ドルくらい貰えるようになったんだよね。貯金とかはなかったから、安定していた感はなかったけど、ちょっと余裕ができた気持ちにはなったよね。NFLで経験積ませてもらっているのにお金貰えるってことにもすごく満足していたし。でも、そのインターンが終わってからおおよそ1カ月間無職で、そのときは、旅行がてら友達の家を転々としながら、飛行機でスパズの面接に行ったりしたよ。申し訳ないから、食費は半分出したりしていたけどね。だから、サンアントニオ・スパズに雇ってもらって、オースティン・トロズで働き始めてから生活が安定した感じかな。

筆者：サンアントニオ・スポーツの組織には、合計で何年くらいいらしたのですか。

山口氏：7年だね。2007年から2014年までの。

筆者：その間、サンアントニオ・スパズがNBAで優勝しましたね。

山口氏：2013-2014のシーズンだね。マイアミ・ヒート<sup>11)</sup>とのファイナル<sup>12)</sup>で。

筆者：サンアントニオ・スパズの雰囲気やポポヴィッチのコーチングをさっそくお伺いしたいところではありますが、その前に現在の活動について聞かせてください。現在は、バスケットボールとどのようにかかわっているのでしょうか。

山口氏：根本的な面では、バスケットに限らせるつもりはないんだけど、俺がいま一番やろうとしていることは、子どもたちもしくはアスリートの自己表現力を伸ばすことかな。それは、アメリカに行った自分自身の経験と、日本に帰ってきて見てきた日本のアスリートだったりクリニックでかかわる子どもたちのコミュニ

ケーション力から感じたことだね。子どもに限らずトップアスリートもすごく自己表現力の部分の問題を抱えていて...

筆者：自己表現力とはどのような力をイメージすればよいのでしょうか。

山口氏：自己表現力っていうのは、喋ればいってわけではないんだけど...

筆者：喋れるだけなら、表現でなくともコミュニケーションが取ればよいということになってしまいますもんね。

山口氏：そう。自分がやりたい・やりたくない、好き・嫌いというものを伝えられる力、これが自己表現力だと思うんだよね。その伝えかたは、ちゃんとそれを伝ええるのであれば、態度に示すのでもいいんだよね。人の目を見ているふりをして、完全に目が死んでるみたいなのは、ナシかなって思う。違うと思うんだったら違うと言えればいいし。

筆者：日本の指導現場では、目をきちんと見て、すごく話を聞いているような感じだけれど、生き生きしていないようなシーンを見かけることが多い気がします。自己表現力を大事にするなら、納得していないとかわからないということがあれば、子どもたちや選手は、そういう表情になってもいいんじゃないかということですよ。納得できないなら納得できないでもいいし、わからないならわからないということを示すことが大事な気がします。

山口氏：そう。首を振っていてもいいし、暇なら暇だといってもいいし。むしろ、その場からいなくなればいいし。なかなかハードルは高いんだろうけど。そもそも、なんで聞きたくもない話を聞いているのかってことだけど、結局それは、周りの大人とか指導者の影響があるんだと思う。

筆者：指導の最初の段階で、「人の話を聞くときは目を見なさい」とか「整列をしなさい」とかといった型を強調されてしまうと、型が固まってしまって表現しにくくなってしまいますよね...

山口氏：「前倅え」とかさ、「みんな体操座り」とかさ、もちろん俺もやってきたけど、いま改めて見ると、すごく違和感がある。だって、そこに力を注ぐよりさ、話を聞きやすい姿勢になった方が俺はいいと思う。姿勢ばかりを気にしていたら、話が入ってこないもん。「きついなー」とか思っちゃうと、話聞けないし。

筆者：非常に興味深い点ですので、改めて後半のほうで話を詰めていきたいですね。

山口氏：そうだね。で、バスケにかかわる機会は多いんだけど、それはやっぱり自分の好きなスポーツだし、自分の好きがそこにあるっていうのもあるし、あとは、自分の特技でもあるはずだから。経験値からしてね。こういう話を伝えていくなかで、ティム・ダンカン<sup>13)</sup>の話とかポポヴィッチの話とかがあったほうが、やっぱり伝えやすい。そこに興味持ってくれる人がいるっていうのも、自分の強みだと思っているから、そういう意味では、別にバスケにこだわらなくてもいいんだけど、自分のバックグラウンドとのかかわりからバスケとのかかわりは多くなっている感じがな。

筆者：現在は、クリニックなどで現場とかかわることが多いのでしょうか。

山口氏：クリニックがほとんどだね。まあ、あとは、プロ選手のキャンプとか、以前はアドバイザーみたいなこともやったけど、基本的にはクリニックが多いかな。

筆者：僕はダイスさんがクリニックへ積極的に出向っていること自体が面白いと感じています。おそらく、アスレティックトレーナーとしてだけ参加されているわけではないですよね。そこには、経験を伝えることも含まれているかと思います。そうなってくると、ダイスさんの役割が面白いなと思ってしまいます。ダイスさんは、トレーナーの枠にとどまらずに、あるいはトレーナー以上の大きさでバスケットボールの現場にかかわっているように思います。ある意味でそれは、ダイスさんがダイスさんとして参加されているといえますか...

山口氏：ほんとそう思う。昔はトレーナーとしての技術を磨くとかそういうところに関心があったんだけど、いまの俺の興味って、なんていうんだろうな...。いままで磨いてきたスキルをアップデートできる余地があるのもわかっているんだけど、それ以上に、いままで培ってきたものをどう伝えるかというところがすごく大事で。伝えるためには、やっぱりこれまで見てきた世界を伝えることが大事で、「自己表現ってこういうことだよ」ってことを身体を通じて伝えるってことに興味があるね。

筆者：「自己表現を身体を通して伝える」ですか。興味深いです。

山口氏：結局、怪我をしなくなるために大事なことで、自分の感覚を持っているかどうかが重要で。たとえば、「痛かったら痛い」と思えることが大事で、「痛いけど大丈夫」ではなく

て、痛いなら痛いって思えばいいのに、そこを押し殺すみたいなのをやってる子がすごく多いんだよね。それはアメリカにも多少いるんだけど、特に日本の場合はそういう子がすごく多い。身体に目を向けていくことで自分を発見していく、俺のなかでは、その人の性格と身体は凄くマッチしているから、怪我しがちな人は自分の感覚がよくないことが結構あって。身体を通じて自分を知る、もしくは、トレーニングってものを通じてその人自身を見つけるきっかけを伝えていくことばかりやっているよね。最近。

筆者：非常に興味深いですね。身体と心の関係というのは、これはもう哲学の議論になってきています。自分にとって心と身体は別なのかどうかと考えると、完全に切り分けることはできないと思います。でも、トレーニング科学ひいてはサイエンスの対象となれば、そのときには、心と身体は切り離され、モノとしての身体を見ていくという作業になります。にもかかわらず、実生活や実践の場面では、それらはぴったりとくっついていたりもする。まさに先ほどおっしゃったとおり、身体を知ることが自分を知るにつながりますし、表現の問題についても身体を基盤にして可能になるでしょうし。そうした世界を伝えようと思うと、おそらく、「トレーナーとしてこういう専門知識があるから教えますよ」というスタンスだけでは、伝わらないと思うんです。それこそ、ダイスさんの経験そのもの踏まえて伝えていく必要が出てくるんだろうなと思います。よく専門性ということが言われますけれども、当然それは大事だということは断っておきますが、専門性だけ・役割だけでは限界があると思うんです。人と人がかかわるものがスポーツだと思うので。特定のパーツの専門知を持ちつつも、広く人間という視野からアプローチしていくことが重要だと思います。

## 2.2 スパーズにおけるコーチングについて

山口氏：そのとおりだと思います。それを学んだのは、やっぱり、俺のなかでの理想のリーダー...っていう言い方は正しいかわからないけど、ポップかな。ポップがなんであれだけ勝てるのかっていうと、もちろん選手がいたからってのもあるけど、ポップもチームがいたからって言っているし、でもポップもいたからだと思うし、みんながいてのスパーズ

だってのは確かなんだけど、ポップとほかのコーチの違いは... たくさん優秀な若手のコーチはいっぱいるのよ、戦術、知識、諸々において。ブラッド・ステーブンスだって戦術に関しては凄いことやったりするわけじゃん。クインだってそうだし。今回優勝したミルウォーキーのビューデンホルツァーも、もともとサンアントニオのアシスタントコーチだったわけだけど、その当時、なんでサンアントニオが勝てるどころに来ていたかという、ポップの知識じゃなくて、一人ひとりと繋がるコミュニケーションだったり、それぞれの文化を理解して、その文化をみんなとシェアする能力とかだと思ふんだよね。ポップは、いいものはいい・悪いものは悪いという部分は絶対に曲げない、相手がだれであっても。こういうところから生まれてくるリスペクトとかがあったけど、でもやっぱり、人として繋がっているやさしさとか温かさが根本にあって、バスケットボールがすべてではなくて、「人生って色々もつとあるんだよ」ってことを教育してくれる部分とか、人間味の部分だよ。それはポップが歳をとって、いろいろ経験してきたっていう経験値の部分も絶対デカイと思ふのよね。そういう経験値と彼の人と繋がる力っていうのがやっぱり基盤にあるかな。そのうえで、あとは、自分の持っている引き出しをどのタイミングで出すかっていうだけの話だよ。一人ひとりをちゃんと見ているからこそできることだから、ポップは選手を駒とは決して考えない。今回のオリンピックでも、エキシビジョンでナイジェリアに負けて<sup>14)</sup>、インタビューからナイジェリアみたいなチームに負けてどうのこうのって言われたときに、「お前らはナイジェリアをそんなに格下に見てるの」とか「格下とかこの世の中になんだよ」とか言って相手へのリスペクトは絶対持っているし。彼自身が「お前らなめるなよ、俺らと同じ人間だぞ、お前ら記者と俺らも同じ人間なんだよ」っていうようなことを伝えているなとも思ったよね。最終的にアメリカが優勝した後に、ポップがKD(ケビン・デュラント：筆者註)とか何人かの選手に金メダルをかけてもらっている写真があった。この短期間でもそういう人間関係を築いているんだなって思った。ああいうスーパースターの選手とどうやってコミュニケーショ

ンを取っているのかなって思っていたけれど、たぶん、スパーズのときと変わらずに、エゴの強い選手たちを相手に、ほんとうに親身になって伝えて来たんだと思う。最初のほう勝てなかったときに、いろいろあったと思うよ。でも、そんななかでも、彼自身は自分を絶対に曲げないで一人ひとりと向き合っていて、一人ひとりと話す時間をたくさん作っただろうし。だから、最後のあのシーンが一番よかったね。ポップが苦笑い、照れ笑いしながら数名の選手から金メダルをかけてもらっている姿は、やっぱりポップなんだなって。

筆者：いまおっしゃった「人と繋がる」というニュアンスは、非常に大事だなと思います。先ほど「駒」という言葉が出ましたが、ある意味では、チーム戦術に長けてゆく場合には、人を「駒」として見ることも重要になってくるわけですが、しかしそれが過ぎてしまうとやはり問題です。僕らの研究領域だと、人間疎外、ないし疎外<sup>15)</sup>という言葉が使われます。これは、チームスポーツで起こりがちな現象で、人としてではなく、モノとして・手段としてのみ選手が扱われてしまう問題です。疎外は、チームスポーツでは、気を張っていないと簡単に起きてしまう問題だと思っています。疎外が生じてしまうと、たとえ勝利を手に入れたとしても、当の選手からすれば、その喜びとか達成が自らに還元されなくなってしまいます。ビジネスの要素を含むプロの世界では、選手が「駒」のように扱われうる可能性が高くなる気がします。だからこそ、「駒」ではなく「人」と繋がるということは、スポーツにおいてとても大事なんだろうと思います。

山口氏：だから結局、スパーズの文化って繋がりが大切にされていて、みんな外のチームにいてもサンアントニオになんらかのかたちで帰ってくるのよ。オフシーズンに遊びに来たりとか、出ていった後に「サンアントニオに戻りたいよ」みたいなことを言う選手もたくさんいる。また、選手を他チームに出すときも、苦しんで出すんだよね。今回のパーティに対しても<sup>16)</sup>、やっぱり「ありがとう」っていうことをすごく言っているし、トリビュートみたいなものを作って流したりしているし。唯一、クワイが出ていくときは、いろいろあって。でもポップは、彼を尊重するから、「お前の人生あっての決断だしね」っていう感じで最終的に見ていたよ。だから、ポップ自身

は、一人ひとりを尊重するところは変わらないんだよね。「これだけやってあげたんだから、お前その分返してよ、俺に」みたいな感じで見返りを求めることはなくて、選手の幸せとか選手の決断を大事にするよね。選手が育ってきて、いいオファーが外から来たらそっちを取らせるもん。お互いにとっていい関係で終われるから、みんな外に行ったときに、お金は貰えたけどやっぱり満足できないなみたいなことがあって、帰りたいて思う選手が結構いたりする。そういうふうには、家族って感じは常にあるよね。

筆者：「見返りを求めない」という点は、重要なポイントなのかなと思いました。これは、アカデミックな言葉でいうところの、「交換」と「贈与」の問題<sup>17)</sup>にかかわっている気がしました。「見返りを求める」コーチングは、概念的には、「交換」にもとづくものであると言えます。「交換」の概念は、貨幣の原理と似ています。つまり、「これだけお金を払ったから、それをくれ」という論理です。コーチングの場面では、こうした考え方が求められる局面もありますが、しかしそれが強くなってしまうと、自分に還元されたいがためのコーチングになってしまいますね。そうすると、コーチの思惑から外れる人に対しては、ものすごく冷たいコーチングになってしまいます。反対に「贈与」は、自分を差し出して、ただ与えるだけの態度ですよ。ポポヴィッチのお話を伺っていると、「お前たちが幸せになってくれればいい」というような贈与的な態度を感じます。それはやはりポポヴィッチの優れた部分である気がします。僕は昔、テレビの解説やネットニュースなんかで、「統率力」や「厳しさ」の面でポポヴィッチが特徴づけられているのを見ました。しかし、お話を伺っているかぎり、ポポヴィッチはそれだけで形容できない。やはり、「人との繋がり」としかいえないような魅力を感じてしまいます。

山口氏：そうね。もしかすると、いまと昔は違うのかもしれないけれど、たとえば、2007年に優勝した直後、チームのスタイルが少し変わってきて、3ポイント中心のチームになっていったんだよね。その頃、これも多分ポップがやりだしたんだけど、野球とかで手でサインするように、口じゃなくて手で指示を出すことを始めた。いまは当たり前だけど、それは、スパーズが先駆けだと思うんだよね。それで、プレーコールっていうのがたくさん

あって、色々な種類があって、それを全部練習するのは、新しく来た選手とかはめちゃくちゃ苦労して。最終的に、それも、数年たって、全部プレーを固定してゆくと選手の自由度がなくなるから、最初のかたちだけ決めて、最後は選手に任せるみたいになったのよ。でも、練習のなかでは、色々な型を練習しているから、「こういう関係でこういう状況になったらこういう動き」みたいな感覚は、みんな理解できるみたいな方向に変わっていった。で、当時、3ポイントっていうのも、結構主流になりだしたから、外のシュートを打てる選手を結構集めて、シーズンで60勝とかした年もあったんだけど、でもそれでプレーオフですぐに負けてしまって。結局ディフェンスが必要とか、ティム・ダンカンばかりで攻めるのは違うとかっていう話になって。そのなかで、ジョージ・ヒルを放出する代わりに、クワイ・レナードっていう選手を獲得するっていう話になって、色々な思考錯誤があって。選手一人ひとりの個性を出しやすい環境を作っていくっていう流れがあるんだけど... そう、雁字搦めにするみたいな強制は、もしかすると、一時期最初の頃はあったかなって気はするんだけど、でも、ポップの印象は...まあシステムはあるよ。ある程度の決まり事がないと、チームはまとまらないから。けど、選手個々の個性をすごく見ている印象がある。だから、がちがちにする人ではないし、厳しい印象というのもよくいわれているけど、最初それ聞いたとき「え、そんなふうに見えるんだ」って思ったね。それくらい、俺にとってポップは温かい人でしかないから。メディアの解釈も微妙だったりするからね。

筆者：そういう解釈になってしまうのは、切り取り手の問題とか語り手の問題がありますよね...

山口氏：ほんとそういうのを見ててさ、いますごく仲良くしている青木康平<sup>18)</sup>さんが頭に浮かぶんだよね。康平さんも、たぶん、「おっかない人」とか色々な印象がバスケット界では強いんだけどさ、康平さんは、ほんとポップみたいだよ。子どもたちとの接し方がものすごく上手で、それでも彼は、「これでいいのかな」って言いながらやっているんだよね。子ども一人ひとりの個性を見て、それをどう伸ばすのかってことを考えるし、伸ばし方としても、やり方としてはほとんど何も言わな

い。「これは言ってあげなきゃまずい」ってときしかほとんどなにも言わないし。それなのに、ほんとに子どもたちは、どんどん伸びていくし、違うチームになっていくんだよね。やっぱり、表に出る部分、特にSNSは、いまの世の中に影響を与えているよね。表向きをよくするっていうかさ、NBAだったりプロ選手でもそれたくさんあるのよ。「こいつ本物じゃない」「こいつプレーオフだと力発揮できない」っていうような雰囲気の手ほど、メディアでは表向きは凄くいいから、会って話しているときも、いい顔しているんだよ。それが、すごく違和感なのよね。

筆者：ある種の嘘くささですか？（笑い）

山口氏：そう（笑い）。バランス感が妙によすぎて、でもそういう人ほどダメだったりするよね。ケビン・ラブ<sup>19</sup>とかも、俺のなかではそういう雰囲気があったかな。「すごくいいやつ」っていう印象だけど、でもプレーオフは任せられないみたいだね。

筆者：しかし、ケビン・ラブは、パニック障害を告白していたこともありましたがね。その原因には彼のもともとの特性とかもあると思うんですけど、ケビン・ラブなんかは、「いい選手」「献身的な選手」っていうイメージをものすごく着せられていた印象もあります。そういうイメージを着させられてしまうと、むしろ選手の側も、「そうあらねばならない」というものを刷り込まれてしまう部分もあると思うんですよね。そうした部分は、スポーツ選手としては辛いところでもあると思います。

山口氏：たぶん、そういうこと背景にはさ、社会の期待とかどうあるべきとかっていうものに対して、ほんとうの自分じゃないんだけど応えなくちゃいけないっていうものがあったり、でも周りが喜んでくれるからみたいなのがずっと積み重なってたんじゃないかな。プロ選手っていうのは、ほんとうにそういうのあるよね。むしろ、クワイとかティム・ダンカンみたいな選手たちって、あんまり外のことは知ったこっちゃないし、彼らは彼らの幸せを追求しているから、それができている人たちは、そういう問題に簡単には陥らないと思う。

筆者：自分の追求に集中できること自体が幸福なのだろうと思うのと、ここでもまた、人との繋がりやかかわりというものが大事なのだろうと思います。「こうあるべき」というのは、スポーツにおいておそらくついて回るでしょうし、ある

意味では、それに応えるということが人が成長するということなのだろうとも思います。つまり、いまの自分ではないものになってゆくということが成長という現象なのだと思うんです。でも、一方でそれは、先ほど述べた疎外の問題にも繋がってしまう可能性もありますし、「こうあるべき」に応えることだけが自分のアイデンティティのようになってしまうと、スポーツ選手は相当辛いだろうと思います。しかし、そのようなときでも、近くに人として付き合ってくれる人がいるかどうかで、その選手の生きかたは大きく変わる気がします。そういったところは、ポポヴィッチは、意識していたりするものなのではないでしょうか。それとも、当たり前のように天性の感覚で人としてかかわっているのでしょうか。

山口氏：意識もしていると思う。やっぱり、プレーオフだったりファイナルになってくると、特にメディアのコントロールの話をする。「メディアはいろいろ聞いてくると思うけど、大切なのはそこじゃないよ」って話はよくする。まあ普段のポップの姿を見てると、それはみんなわかることだけだね。常に彼は、彼だね。もちろん、「コーチ・ポポヴィッチ」っていう周りの期待もあるし、それを自覚しているけど、わかったうえで彼は、常に彼なんだよね。俺も当時はずっとわからなかったんだけど、スパーズの練習の場に、高校とか大学のコーチが見にくるのよ。自分はこんなに見せて大丈夫なのかなって思っていた。でも、ポップがいつも言っていたことだけれど、「俺らのやっていることなんて誰でもできる普通のことだからね」って感覚なのよね。でも、どこでどういうタイミングでそれを発揮するのかっていうのが一番大事で、それは練習を見ただけでは真似できるものではないってことをわかっていたからだろうね。一方でポップは、練習が終わったあとに、すごく熱心に高校とか大学とかのコーチたちと議論しているんだよね。コートの中で、そういうのを見ていて、NBAとか世界で一番とか言われるコーチがなんで高校とか大学のコーチとこんなに議論しているのかなとか、どういう意図があるんだろうとか、全然意味が分からなかったけど、いま思うと、ポップはポップで、NBAでのスペシャリストかもしれないけど、高校を指導するとか大学を指導するという違うチャレンジについて

知りたいんだろうし、若手のコーチ陣が持っているアイデアとかについての意見交換を単純に楽しんでいただと思うんだよね。

筆者：純粹にバスケットとかコーチングを追求しているという意味での議論、つまり、高校や大学のカテゴリーのコーチに教えるということではなく、その人たちと議論して一緒に追求するというニュアンスですかね。

山口氏：一緒に色々な景色を見るとか、そういうことを追求していく学びとか、意見交換ができるとか、色々な意見を聞くとか、そういうのをシェアしていくことも含めて、それが楽しくて好きなんじゃないかなって思うね。

筆者：そういったことを伺っていると、ポポヴィッチは、「遊んでいるんだな」「子どもなんだな」という印象を受けます。もちろん、いい意味で(笑い)。

山口氏：そうそう。その意味では、言い方を変えると、常に成長とかチャレンジをしている印象があるよね。根本は、バスケットボールとかコーチングが好きなんだよ、やっぱり。好きなことを自分の仕事にできる幸せを教えてください。そのうえで、「でも、これが(バスケットボールが：筆者註)すべてではなくて自分の人生ありきのものだから」っていうことも強調するよね。でも、好きなことをビジネスにできていることへの責任についても話してくれていたね。「好きなことほど続けるのが大変」ってことのバランス感があるね。

筆者：やはりここでも、人生にまで話が広がってきて、バスケットボールの指導だけではなく、ある種の教育性がかかわってくるのですね。

山口氏：ほんとうに人生観は、バスケットを通じて教えてくれている感じだと思うな。

筆者：スポーツと教育が結びつきやすい現場は、おおよそ運動部活動かだと思います。それは、制度的にそうです。一方で、概念的には、スポーツと教育は異なるものといわれています。しかし、ポポヴィッチに関するお話を伺っていると、制度的問題とか概念的な差異を超えて、スポーツと教育には結びつきがある気がしました。スポーツの範疇を超えて人生に関することまで教えてゆかないと、その人がスポーツというもののなかで不幸になってしまう可能性があると感じました。その意味で、ポポヴィッチのコーチングからは、人生というレベルでの善さを伝えようとする態度を感じました。

山口氏：確かにそれはあるかもしれないよね。人生が

土台としてあって、その一部としてバスケットボールの仕事があるんだよってことを教えてくれているよね。つまり、仕事のために人生があるわけではないよってことだよ。バスケットボールでスーパースターになって、お金いっぱいもらって、世界的地位があがったからといって、結局バスケットボールは、人生の一部であって、家族とか友達とかもっと大事な人生があるんだからねってこともそういうニュアンスで伝えていた可能性はあるよね。

筆者：教育だからそういったことを教えないならなくて、「善く生きる」ということを大事にしてバスケットボールを追求している気がします。もし、そうだとすれば、ポポヴィッチのコーチングは、まさに古代ギリシャのソクラテスやプラトンと重なる部分があるように思えてきます。ソクラテスは、若者たちと対話をするなかで「善い生きかたとはなにか」を探究したわけですよ。彼は、体操場で議論をすることもあったといわれています。また、プラトンは、いまでいうレスリングに打ち込みながら善さとか幸福について探究していました。

山口氏：ほんとうにそんな感じだよ。スポーツって人生の縮図みたいで、それをすごくわかりやすくしてくれている気がする。結果が伴うスポーツでは、そこに至るまでに近道はなくて、ほんとうにそこに向かって向き合っていかなければいけない。そのなかで失敗があったり、負けたりとかさ、そのなかでどう変わっていくのかっていう対応力とかが問われてきたりとか、色々な葛藤があったり、勝てないことがずっとあったりしてさ。人生ってたぶんそういうもので、スポーツはそういうものとか自分の成長とかを感じやすいものだと思う。成長することの楽しさとか、成長することの難しさも同時に見えるし。そして、それを乗り越えてやってきた人たちが戦うプロの世界とかオリンピックとかパラリンピックとかを見ていると、やっぱりスポーツって凄いなって思うんだよね。そういう感動をえられるとき、やっぱりスポーツってピュアだなんて思えるんだよね。負けようが勝とうが、そこに泣き崩れる人もいようが、勝ちに向かって頑張っているってその姿がすごく、その瞬間には、大人の社会の政治絡みどうのこうのっていうのはほとんど関

係なくて、だからみんなの心が動かされるんだらうね。だからやっぱり、人間の生きかたとスポーツって繋がっていると思う。でも、それってなにかの数字に表れるものではないよね。結局数字で表せるものってほんのわずかな部分でしかなくて、参考にはなるけれど、人生そのものを表せるものは数字にはないよね。人気かどうかとかインスタのフォロワー数が何人とかさ、やっぱりそういうところじゃないよね。

筆者：実はそこも、スポーツが人生の縮図になっていると思います。昨今では、データサイエンスとかスポーツ科学とか重視されるようになってきて、それこそ最近では、期待値とかそのプレイヤーの efficiency とかが計られるじゃないですか。もちろんそれらは軽視できないですけど、でもそれらは参考にはなっても、実際の勝負の場面はわからないですから、最後は自分で考えて表現していかなければならないですよ。これって、人生もそうじゃないですか(笑)。

山口氏：ほんとうにそうなんだよ。これが efficient だって言われても、結局そうじゃないところで勝敗がわかれたりとかさ。トレーニングにおいても、エビデンスが強調されるけど、そのエビデンスがどういう環境で取られたエビデンスなのかってところはちゃんと考えないといけないよね。人間って多様性があるから人間なわけで、機械じゃないからさ。

筆者：そこはものすごく重要ですね。

山口氏：人間には、個性があるわけだよ。一人ひとりの個性にあらゆるエビデンスがあてはまるわけがないんだよ。もちろん大きな傾向はエビデンスから示されるけれども、その傾向がわかることでこの人はこの傾向から外れるタイプの人なんだってことがわかるという意味ではいいけど、最終的に自分にとっていいものがなにかを見つけるのは、その人自身だから、その人自身の持つ感覚がすごく大事だと思う。だから、トレーニングに関しても、さっき言ったように、自分と向き合うこととか、「自分ってなに」とか、「自分にとって気持ちがいい」ってなにかが大事で、それは隣の人とはたぶん違っているんだよ。運動の表現のしかたも、「ガチャーン」って感じなのか「ドカーン」って感じなのかとか人それぞれ違うわけだけど、そういう表現を自分なりに持っていることが大事なわけで、その人の考えかたとか自己表現を養うのは、

そういうものを通じてだらうね。

筆者：科学の発展の歴史からわかることですが、いわゆる近代の科学では、客観性が大事にされるようになってきました。それは、意味とか価値とかそういう主観的なものを極力排した知を産出する態度だといえます。しかしそれゆえに、その知がなにになるのかとか、どういった類の知なのかといったことが、客観的な知識からは切り離されてしまったともいわれています。そういう知識をわたしたちはエビデンスと呼んでいるわけです。そう考えると、科学的根拠があることと「善さ」は、ほとんど別の次元にあることがわかりますよね。こうしたことって、おそらくスポーツをしていると、すぐにわかる話だと思うんです。大学とか中高のスポーツは、「体育会系」とか呼ばれていて、いまだに頭の固いステレオタイプみたいなイメージもつきまわっている気もしますが、でも、ほんとうは、科学のよし悪しとか、それと違う人間の幸福とか尊厳とか善さとか多様性とかっていうものを肌感覚で知りうる人たちなんじゃないかと思うんです。先ほど、ダイスさんがおっしゃった身体への気づきというものもそうです。僕の理想論みたいになっていますが、その意味での知性ある存在として一生懸命スポーツに打ち込んでいる人がとらえられればいいなと思っています。おそらく、そのためには、多くの課題がありそうですが、

山口氏：そういう点で、ほんとうにスポーツっていいんだよ。アスリートは、ほんとうに肌感覚でわかっているんだよ。だって、近道ないもん。俺らみたいなトレーナーの世界では、セミナーとかで「この技術を身につけたら、こうみんなを変えていきます」みたいな話が転がっていたりして、そういう近道をみんな求めようとするんだけど、ほんとうはそこじゃなくて地道なんだよね。

筆者：ここでまた、アスリートの自己表現力の話にかかわってくる気がするのですが、そういった酸いも甘いもちゃんと身体で知っている人たちがアスリートだとしたら、アスリートが適切に自分を表現できるということが大事なんじゃないかなと思ったりします。しかし、僕の印象では、この手の表現の部分が豊かではないと感じることも多いです。たとえば、「みんなに感謝」とか「誰々のおかげで」っていう言葉が色んなアスリートから聞かれます。これは大事なことです。みんな同じようなことばかり言って



いるなって気もしなくもないんですよ。もちろんそれが真理の場合もありえますが、そう言わなければいけないからそう言っている場合もありそうですし、あるいは、その言葉しか知らない場合もあるのではないのでしょうか。僕としては、アスリートがもっと豊かな言葉で自分の感覚とか感情を表現できればいいのになと思って歯がゆくなることがあります。

山口氏：その意味では、今回のオリンピックで陸上に出場した田中希実さんは、興味深いこと言っていたよ。彼女の入賞したときのインタビュー聞いてすごいなって思ったし、そもそも試合の取り組み方が自分のチャレンジのためにやっているのよね。自己ベストで準決勝進出を決めたときのコメントで、「目標通りいきました」みたいなことを言っていて、「予定通りいきました」ではなかったんだよ<sup>20</sup>。「目標通りいきました」ってありそうであんまり聞いたことがなくて。予定してたとおりうまく自分の力を出しましたじゃなくて、上の目標があって、それに向かってちゃんと向かいましたみたいな。安全にいったんじゃないくて、目標に向けて走って、ほんとにそこに辿り着いたんだっていう印象を受けて、その後のレース後にもめちゃくちゃ自分を分析していて、自分の言葉で話していた。羽生結弦にしても、イチローにしても、ダルビッシュにしてもこの感じがあるのよ。そういう人たちって「若いのに大人だな」とか言われるんだけどさ、でも、アメリカだとそんな人ばかりだからね（笑い）。若くてバカかって思われるようなことも言うけど、自分の意見をしっかりと言うからさ。カイリー・アービング<sup>21</sup>だって、「地球はフラットだ」ってことを平気で言うからね。俺の解釈だと、彼が見ている世界からすれば、やっぱり地球はフラットで、彼自身が宇宙に行ったことがないから、地球が丸いっていうのは誰が言っているのかわからないし、嘘っぱちかもしれないし、その可能性はまったくゼロではなくて、でもみんながそうって言うからそうだって思うっていうのはおかしいんじゃないかってことだと思うんだよね。だって、カイリー・アービングは、結構頭もいいだろうし、色々考えていて自分の哲学があるし。こういう話をした後だったかする前だったかに、クリニックで子どもたちに「地球は丸いと思うか平らだと思うか」って聞いたら

50人くらいのうち2人くらいフラットって答えた子がいて、理由を聞いたならそれっぽい理由を言っていたのよ。面白いなと思って。そういうのって自分の言葉を持っているか持っていないかなんだよね。大人っぽい大人っぽくないかって、意見をちゃんとと言えるかってところだと思う。「いや、わかりません」とかじゃないんだよね。

筆者：ここまでの話を受けて、改めて「自分の言葉」というのが非常に重要なのだろーと感じています。僕なんかの場合だと、研究をするうえでの「自分の言葉」をもっと探究したくなりますけれど、アスリートにとっては特に重要かと思えます。先ほどお話ししたとおり、アスリートは社会的なものや経済的なものに飲み込まれやすい存在でもあると思うので、「自分の言葉」を発することができるのがとても重要になる気がします。これは、トップアスリートだけではなく、子どもでもそうかと思いますが。

山口氏：そうだよ。ほとんどのアスリートが指導者とか大人に飲み込まれることがあるよね。自分のなかではいいって感じているはずなのに、「おめー違うだろ」って言われて、「ああ、ダメなんだ俺、やっぱりできないんだ」って思ってしまっ。でも、ほんとうは、「あの人が間違っている」って思ってもいいだろうし、「いや、俺いいって思いましたよ」とか「俺よかったですよ」って言える子どもたちがどんどん増えてほしい。「お前生意気だな」とかさ「お前なに歯向かってるんだよ」みたいなことを言う指導者を見ていると、「それを許容できないのかな」って思っちゃうよね。

筆者：究極的には、やはり、人間性の喪失の問題と結びつくのでしょうか。

山口氏：そうそう。

筆者：指導者や大人が言うことに対して「はいはい」と聞くだけであれば、それは自分でなくてもだれでもよいということになってしまいますよね。その意味で、「自分の言葉」とか「表現」といったものの重要性は再認識させられます。

山口氏：それこそ、AI (Artificial Intelligence) が人間を滅ぼしてゆく世界観だよ。人間の代わりにAIがなんでもやっちゃうみたいな。

筆者：そうですよね。僕は体罰の研究をしています。そこでは「信頼関係」に対する誤った認識の問題性が主張されています<sup>22</sup>。いまのお話しとリンクさせると、「信頼」という言葉もき

ちんと考えなければいけないんだろうと思います。つまり、「あいつはこうしてくれるはずだ」という意味での信頼の側面だけを強調してしまうと、先ほどの「交換」じゃないですけど、信頼の意味が「こうしてくれなければダメだ」にどんどん変わって行って、究極的には、AIによって導きだされた東京メトロのダイヤが一番信頼できるみたいなことになってしまう気がします。それは、「この時間に必ず電車が来ます」「この時間に必ず着きます」という現実性のみが重視されるという意味においてです。でも、人間は、ほんとうはそういうものではないですよ。機械とは違って、人間は、個性とか偶然性とかがあって、場合によっては敵対することがあったりとか、そういった面が必ずあるはずなんです。

山口氏：そうね、人間の面白さとかチームスポーツのすごさは、1+1が2ではなくて、それ以上の何倍にもなりうる可能性を秘めているところだと思うんだよね。スポーツにおいても、それが理解されていないと、結局、指導者が抑えつけるだけになって、指導者が持つ力までしか選手が伸びなくなってしまうんだよね。ほんとうに勝てるチームは、それぞれの力によさがでてきて、悪さをお互いに補うことによって、何倍もの力が出てくるし、それがほんとうの組織っていう organization であるし、チームだろうから、個性をちゃんと引き出せるようにすることがチームとしてリーダーとしてすごく大切だし、そこが人間の魅力だよ。

筆者：その点に関係して、もう一度ポポヴィッチのコーチングに戻らせてもらいます。先ほどお話ししたように、チームスポーツにおいては、システムとか決まり事というのは、絶対にあるものだと思います。一方で、個性を尊重したいという部分もあります。この両方がものすごく大切ななかで、システムや決まり事の正しさそのものを選手たちとの対話から問いなおすことは一定可能なんだろうと思います。つまり、「このシステムこれだけでなくもよかったな」という具合に。しかし、一方で、「これに関しては、このシステム、この決まり事でやってくれないと困る」というような局面も、スポーツにはあると思います。この場合において、個人の主張とポポヴィッチの考えが対立したときに、どういことが生じるのかがすごく気になります。

山口氏：まず、プロに限っていうと、もともとの人間

性がある程度見えていて、自分の主張を持っている人間が集まっているから、ある程度お互いに関する共通認識というのがあって、そのうえで、そういうのがまったく合わない人間は、最終的に外に出ることがあるかな。だけど、特にポップのチームにいる人間たちは、基本的な共通認識があったうえで、あっちこっちかみたいな対立があった場合は、どっちからでもいいんだけど、まずはそれぞれやってみてから決めようかっていう試みになるよね。これは俺の予想だけれど、バチバチになるっていうよりは、「わからないな、確かに答えはわからないよね」ってなって、「じゃあ、とりあえず、お前が言うならこっちやってみようか」ってなって、それを見てどうなったかを考えるだけだと思うのよね。そういうシンプルな問題かな。でも、もちろんなかあるときは、リーダー株のティムとトニー<sup>23)</sup>とマヌ<sup>24)</sup>を集めて、ポップと4人で一緒に座って話をしていた。それで、「ほんとうにここ」っていうときは、ティムとポップだけで話すっていうこともあったね。いまの話題に関連したエピソードとしては、クワイ・レナードをドラフトでピックする代わりに、ジョージ・ヒルを放出しなければならなかった話があるかな<sup>25)</sup>。そのときは、俺もその場にいたけれど、ほんとうにポップはジョージ・ヒルをどこかのチームへ放出することに頭を抱えていて、でも、GMのRCとかは、チームが次のステップに行くためには、クワイ・レナードを獲得しなくちゃいけないということもわかっている。で、ジョージ・ヒルを放出してクワイ・レナードにオファーする手続きは、ほんとうはもっと早くできたんだけど、ギリギリまで待ったんだよね。なんでかという、インディアナ・ペイサーズのドラフトピックの関係によっては、ジョージ・ヒルをペイサーズに放出できる可能性があったからなのよ。インディアナっていうのは、ジョージ・ヒルの出身地なんだよね。だから、せめて出身地にジョージ・ヒルが帰れるなら、彼にとっても悪い環境ではないかもしれないから、トレードしてもいいと思っていたんだよね。それで、ドラフトとかトレードの手続きをギリギリまで待ったのよ。ポップはほんとうにジョージのことが大好きだったから、しぶしぶその選択を取ったんだけど、その直後、チームのみん

なもジョージのことが好きだったから、選手とかも「はあ！なんで知らない選手を獲得するためにジョージがいなくならなきゃいけないんだよ」みたいになっていて。だから、ある意味で、最初の頃のクワイへの風当たりは、みんなちょっと強い感じだったし。でも、ほんとうのところは、みんな想いは一緒だったんだよね。「勝ち」っていう大事な目標があったから、ポップの気持ちとか葛藤も伝わっていたし、最終的には、みんな理解したのよ。やっぱりポップもずっと嫌だと言っていたけれど、これまでのRCの仕事を見てきているから、「RCがそこまで言うなら」っていう信頼関係があったんだよね。やっぱり、信頼関係があるから、バチバチってなったときも、どっちかの主張を聞いたうえで、どっちかに譲るといふか...譲るといふとちょっと違うけど、ぶち当たったなかで出てきた答えに行きつく感じだったかな。

筆者：非常に興味深いお話です。なぜこのようなことをお尋ねしたかといいますと、これまた僕自身の体罰に関する研究が背景にあります。指導者による体罰の問題に対しては、指導者が型にはめようとしすぎることやスポーツ集団の集団特性の問題などがしばしば指摘されます。つまり、指導者が設定する枠組みからはみ出してしまふ選手に対して体罰が行使されてしまうことが指摘されています<sup>26,27)</sup>。おそらくそれは、間違いないのだらうと思うのですが、一方で型や枠組みの存在そのものには一定の必然性があると考えています。ですので、型や枠組みそのものを問題にするだけでは、指導という行為が成り立たない事態が生じてしまいかねません。そうすると、放任主義のコーチングになってしまう可能性があり、「みんなの個性がすべて」みたいな雰囲気になってしまう気がします。先ほどお話ししたとおり、チームスポーツや教育であれば、一定は、「こうなってもらう必要がある」という枠組みがあるはずなので、型とかシステムとか決め事の妥当性をきちんと修正する必要がありつつも、それらを全くなしにするということは難しいのではないかと感じるわけです。そう考えると、指導者と選手との関係性のなかで、型とかそういったものと個性とのバランスをどのように調整し、コーチングを遂行すればよいのか気がなっていました。

山口氏：一番大事なのは、たぶん、個々のシステムとかよりも、もうちょっとほんやりしたビジョ

ンとかカルチャーだと思う。チームとしてのビジョンは、もちろん勝つことだよ。少なくともサンアントニオにとっては、そこはブレていないから、いまの結果にサンアントニオはいったわけよ。「大好きな奴なんだけれど勝つためには」みたいな決断は、バスケットボールをビジネスとしているうえで絶対にブレられないところなんだよね。だから、勝つというビジョンがあって、そこに向かっていくなかで、どういうふうに勝ちにつなげてゆくか、それは、スーパーチームを作ることなのか、それとも育成を通じて勝つことなのか、どれがサンアントニオの彼らのパッションになっていくのかってところだよ。地域と繋がってとか地域に貢献してとか。なんでサンアントニオ・スパーズっていうチームに存在意義があるのかってことを諸々ひくくめたところに、それまでの選手たち・コーチたちとか地域柄とかが含まれたカルチャーがあるよね。まあそもそもビジョンに関しては、勝つことっていう明確なものがあるから、そもそもあんまり語る必要はないのだけれど、カルチャーって言葉については、常に飛び交っていたよ。「スパーズ・カルチャー」とかね。そのカルチャーの部分には、人間性が直接的に反映されているから、その部分さえブレていなければ、たぶんどうにでもなるんじゃないかな。

筆者：そのカルチャー自体が崩れそうになってしまうことはあるのでしょうか。もしあるとすれば、そのとき、どのようなことが起こるのでしょうか。

山口氏：もちろん、選手のなかでカルチャーをめぐって対立が起こることもあったけれど、そこはお互いに言いたいことを主張しあって、そういう表現が大切にされる感じかな。結果として、誰かがチームを去ることもあるけど、それでもその人の人生が最優先されるから、ポップは温かく見送るよね。

筆者：その意味では、それぞれが表現することそれ自体が大切にされていて、最終的には、人生というものがもっとも大事にされている感じですかね。やはり、この点は重要だと思っていて、そうした雰囲気がチームにあれば、チームカルチャーに縛りつけられたりとかチームルールに人間が縛りつけられてしまうということはあまりないのだらうなと感じます。ここで少し話題を変えてみたいと思います。ここまでは、ポポヴィッチや組織運営にかかわる話を中心になっ

てきたかと思いますが、選手たちの側がポポヴィッチに影響を与えたみたいなのはありますか。この点は、「表現」や「自分の言葉」、「主張」といった論点ともかかわっているかと思えます。

山口氏：それはもちろんあるよ。マヌがセオリーでは考えられないシュートを打ってポップが怒ったときに、マヌに「これを俺が辞めてしまったらマヌ・ジノビリじゃなくなっちゃうよ」って言われたって話をよくポップはしているよ。ポップは、「選手はいつも自分の視点を変えてくれる、育ててくれる」という話をよくするね。ボリス・ディアウ<sup>29)</sup>との関係とかもそうだったよ。ポップが彼に「太っているからもっと痩せろ」とってことをいうと、ボリス・ディアウは、「俺は太ってるからこのポジションでできるんだよ？」みたいなこと言うわけよ。チームはチームで、ポップにすごく言い返すこともあるし、トニーだって常に筋トレしてたわけではないしさ。トニーなりの身体のケアと体幹トレーニングは絶対していたけどさ。みんな個性あったよね。選手たちがポップをおちょくったりもするし(笑い)。そんなのばかりだよ。選手たちに対して「さっきこう言ったじゃないか」とって怒りだしたと思ったら、選手たちから「いやいや、ポップはさっきこう言ったんだよ」とって訂正されて、「え、そうだった。それは悪かった」とみたいな感じで、「じゃあ、コーチ陣走れ」とか言って自分が走ったりとか。

筆者：コーチ自身がそこで走ってしまうわけですね(笑い)。

山口氏：走ることもあるよ、「失敗した」とって言いながら。

筆者：いま議論したポポヴィッチの側面は、多くの指導者が知るべきなのかなと思いました。指導者が毅然とした態度で一貫していないといけないというようなイメージが強くなりすぎてしまうと、まわりまわって、暴力的な指導と結びつくと考えています。自分の指導理念をなにがなんでも徹底しようとする態度は、そこからはみ出してしまう選手に対して暴力を振るってでも自分の枠組みのなかに収めようと行為へつなげる可能性があります。しかし、当然、コーチであっても間違えることもあるでしょうし、コーチは選手との関係があってこそコーチとなるわけじゃないですか。だから間違ったと思ったら謝ったり、すぐに変えることが大事でしょうし、先ほ

どのコーチ陣が走るという光景もユーモラスな雰囲気があっただけです。そんな風土があることで、失敗を認めることやそれを許容する態度が生まれてくる気がします。失敗が許されない雰囲気というのは、コーチにとっても選手にとっても不幸なんじゃないでしょうか。だからこそ、カリスマとしてのポポヴィッチ像だけではなく、失敗もするし謝ったりもするポポヴィッチの一面も私たちは知るべきなのだろうと思います。

山口氏：その点では、俺が思うに、いま、サンアントニオが直面していそうな問題は、ポップと選手たちの対等性がもしかしたら難しくなっているのかもしれないってことかな。ベテランコーチの引退時期の問題ともかかわるのだけれど、このあいだも、ノース・カロライナ大学のヘッド・コーチが辞めたけど、そのときに言っていたのが、「ここにいるのが自分じゃなくてもよくなった。自分の表現がみんなに伝わらなくなったのを感じた」とみたいなことさ。それを見て思ったのが、引退を決意するベテランコーチたちは、コーチングする能力が今の時代についていけなくなったんじゃないかって、彼らの威厳が強くなりすぎちゃって、選手たちが対等に意見を言えなくなる時なんだろうね。いまの世代のスパズ選手たちって、「コーチ・ポップ」のイメージができあがった状態で入ってくるのよ。だから、「Hall of Fame」級のコーチのもとに来たから、彼の言うことは間違いない」とみたいな感覚が最初からあるわけよ。ポップはなにもしていないでも、一方で、チームが入ったときはポップがまだあまり実績のない頃で、結構対等な立場で、そういうチームを見ていたから、あとから入ってきたトニーにしてもマヌにしても「ここまではポップに言ってもいい、でもポップは尊敬する」とみたいなバランス感が常にチームを軸にあったんだよね。ポップの話をチームから発することで伝えやすくなったこともあったし、選手たちの言葉はチームを通じてポップに伝えられていた部分もあった。そういうカルチャーがあったから、みんなポップと対等な関係を築けていたんだよね。チーム全体の年齢層が若くなると、ベテランのコーチは、その対等性の部分で苦労することもあったりするのかなって気がする。でも、一方でポップが引退をするとは言っていないところに、

いまだに新たなチャレンジをしようとしているんじゃないかなって気もする。実際に、今回のオリンピックでもアメリカ代表を優勝するところまで持っていったし、その際の選手陣のポップに対するコミュニケーションの取りかたを見ていると、いい関係性が築かれていたのも感じられた。まあ、いずれにしても、ベテランコーチのそういう難しさはありがちなんじゃないかな。

筆者：これまた刺激的な議論になってきましたね。威厳が強くなりすぎて言いたいことが伝わらなくなってしまうたり、それによって健全な主張ができなくなってしまうことを「問題」だと感じる価値観は重要なのだらうと思います。逆のパターンは多い気がしますが、威厳を持って、なんにも言わせないようにすると言いますか、権威主義的と言いますか。

山口氏：権威主義でやっちゃうとさ、その指導者の持っているもの以上はどうやっても生まれなわけだからね。

筆者：やはりそこに戻ってきますよね。絶対に化学反応は起きないということですね。

山口氏：そうそう。化学反応は起きないかな。個性がちゃんと出てこないが無理だよ。それには、対等な関係がないと。

### 2.3 日本のバスケットボール現場について思うこと

筆者：「日本の」という括りで語っていいのかわかりませんが、日本のスポーツ文化には大事なコーチング観なのだらうと思ってしまいますね。だからこそ、最初のほうに議論した自己表現力というテーマに戻ってくるんだらうなと思います。

山口氏：昔から不思議に思っていたのは、アメリカで「反抗期」って言葉を聞いたことがなかったのよね。

筆者：ある意味では、「反抗」っていうものがフィーチャーされている言葉ですよ。ちょっと日本っぽいのかもしれません。

山口氏：まさにフィーチャーされているってことだから、いかに抑えつけようとしているのが言葉から滲み出ている気がするね。大人の言うことを聞かない子たちが焦点化されるわけでしょ。たとえば、ヤンキーとかさ、社会に反抗している人たちじゃん。でも、ほんとうは、そっちが正しいんじゃないかって思うこともあるのよ。というか、ある意味では正しいのよ。大人の言うことを聞かずに、自分がこうだと思ったことやろうとしている人たち

なわけだから。それで人に迷惑をかけたり、人をケガさせたりするなら、それはダメだけどね。もちろん、ギャングみたいな人もアメリカにはいるよ。でも、それも、彼らなりの社会への抵抗なわけで。アメリカは、もちろん、白人社会とか色々あるからね。そのうえで、やっぱり日本と比べると、アメリカは、大人たちが子どもたちの言うことを対等な目線ですごく聞くし、一緒に遊びにも行くし、日本だとやっぱり型にはめることが結構気になっていて、会話の始まりでも、「君なに型？ A型？ B型？」みたいな話から始まるよね。そういう会話の始まりかたは、アメリカでは全然聞いたことないけど、日本だと、男だから女だからとか、お兄ちゃんだから先生だからとか、大人らしくとか、型で考えることが多いのよ。毎回そういうのを聞くたびに違和感を感じていたんだけど、その辺がはっきりしてきた。「型」だよ。アメリカの人たちって、お兄ちゃんだからとかお姉ちゃんだからとか気にしないで、brotherとかsisterとかは言うけど、上か下かってよほどのことがないかぎり聞かれることはないし、年齢も基本聞かないよね。

筆者：そのあたりは、言語の構造とかも関係してそうですね。文化の反映が言語の構造になっていたりしますし、一方で、言語の構造が文化に影響を与えるということもあります。先ほどのお話からすると、どっちが上かを下かをはっきりさせようとする感覚が言葉に反映されているでしょうし、その言葉によって上か下かの型が生じてしまいますよね。

山口氏：ある意味では、やりやすいんだよね、型があったほうが。

筆者：裏を返すと機械的なのもかもしれませんね。それは円滑でもあるわけですけど。

山口氏：なんとなく、合っているか合っていないか分からないけど、子どもたちを指導してきて思ったことがあるんだよね。クリニックで出会った山梨県の子どもたちが印象的だった。山梨の子たちは、多少シャイさがあっても、話始めると、最終的に自分から発言する子が多かったんだよね。たまたまかもしれないけれど、で、この前、仙台にもクリニックに行ったんだけど、全然発言できない子が多くて。あと、石垣島の子たちもシャイな子が多かったんだけど、それに拍車をかけて、ほんとうに発言しなかったんだよね。印象的

だったのは、石垣島の子たちは、幼稚園くらいの子たちは凄く生き生きしている感じがあって、やっぱり沖縄いいなって思ったんだけど、小学生の子になってくるとみんな委縮している感じがあったんだよね。間違えるのが怖いみたいな感じで。それってたぶん、島ならではの風土もあるのかなって思って。もしかしたら、実は周りの目を気にして、「こうあるべき」という押しつけみたいなものがある気がしたんだよね。で、仙台のほうは、東北の大震災があって、あの頃子どもだった子たちも高校生になってきたなかで、避難生活を経験して、周りに常に知らない人がいたなかで、大声とか出しちゃいけないとか周りを常に意識しながら生きていた可能性があるよね。ある意味では、ハーフの子たちに対しても同じような感じを感じていて。色んなハーフの子たちを見てきたけれど、ハーフの子たちほど日本人っぽくふるまうんだよね。こういうパターンが結構多くて。というのは、みんなと違う見た目で生まれているから、それを押し殺して、どうにかみんなに溶け込む方法を常に意識してやってきて、自分を出し切れない子が多いんだよね。クリニックで出会った子たちにしても、ハーフの子たちにしても、自分を出し切れていない子たちは、常に周りを意識している雰囲気があってさ。そこで、山梨の子たちの自分を表現してくるあの感じてなんだろうって考えたんだよね。俺自身の経験とか人生お金じゃないとか考えたときに、人生どういう人間が強いんだろうって疑問が湧いてきて、結局、自給自足ができる人なんじゃないかなって思ったんだよね。だって、焦らないじゃん(笑い)。お金を儲けられないってなっても、死なないって感覚はあるだろうし。あと、山梨とか長野とかって、戦争の影響が比較的小さかった地域だろうし、長野に関しては、車の運転にしても、信号のない横断歩道で止まる率が70%以上で圧倒的に日本一なんだって。2位の兵庫は、60%以下で、東京に関しては7%以下なのよ。だから、長野県民は、そういうところゆったりしているのよ。自分の妻のお義父さんが長野出身で、妻は「長野の人ほんとうにいいから」とよく言うんだよね。たぶん、そういう心のゆとりは、戦争の影響とか、死ぬか死なないかとか、そういうものを味わったかどうかとか、自給自足ができる

かとかが関係している気がする。大人たちに心のゆとりがあれば、子どもにあれこれ言いすぎないのかもしれない。それを、クリニックで子どもと出会ってきて感じたんだよね。風土とか色んな理由で周りの目とか死とかを意識して、なにかに怯えて育つみたいなのがない人のほうが、のびのびできているんじゃないかなとか思ったりする。

筆者：とくに、先ほどおっしゃったハーフの子の置かれた状況については、スポーツで活躍することによって、むしろよそ者のようなまなざしを受けてしまうという問題がこれから出てくるのではないかと感じています。昨今のバスケットボールでは、日本代表やアンダーカテゴリーの代表にハーフの子がたくさん入るようになってきているなかで、ある飲み会の席で「あれじゃ日本代表じゃないよね」という声を聞いたことがありました。ひょっとすると、普通に過ごしていたらなにもなかったものが、スポーツの世界で活躍することによって、むしろ差別的なまなざしに晒されるという問題もありえそうです。そうした多様性にかかわる問題は、社会として考えなければいけないのだらうと思います。

山口氏：ほんとうにそうなんだよ。じゃあ、「アメリカはなんだよ？」ってなるよね。どこの国もそうだし。やっぱりそういう問題は、その人のアイデンティティの認識にかかわっている気がするんだよね。ハーフの子たちは、みんな気にしているんだよね。アフリカに行ったら日本人って言われるし、日本に行ったら日本人じゃないって言われたりするみたいで。「俺って何人？」みたいな疑問は、アメリカでも二世の人たちのあいだであったよ。個人的には、今回のオリンピックの開会式で八村塁が日本の旗を持って、大坂なおみが聖火を灯していたのを見て、この時代に適した人選をしたんだなって印象を受けたんだけど、周りの意見を聞いていると、「ただ、世界で通用しているアスリートだからじゃない？」みたいなリアクションが多くて、反応が薄かったんだよね。自分としては、ほんとうに多様性の時代だと思うし、そうじゃなくても、色んな人が前に出られるっていうのは、もっとあっていいはずなんだけどね。

筆者：せめて、多様な人たちが存在感を出せるような生きかたをスポーツから発信していったりとか、少なくともスポーツの場ではのびのびと生きられるといった充実感みたいなものがあつた

りすればいいのですが。しかし、スポーツ自体が「型」を創る場になってしまうと、やはり悲しいなと思ってしまいますね。さて、議論がかなり長くなってしまいましたが、最後にダイスさんからなにかございますでしょうか。

山口氏：全然別だけど、スパズにいたときの出来事でずっと心に残っていることがあるんだよね。パティと一緒に飛行機に乗っていたときに、日本のニュースで「ゆるキャラ」が紹介されていて、なんか嫌だなんて思ったのよね。いま考えると、マスコットがどうかってことに対しての嫌な気持ちではなくて、俺自身が持つそもそもの日本へのネガティブなものに関係していた気がするのだけれどね。で、そのニュースを見ながら、「うちの国ではこんなのやっているよ。ほんと日本嫌なんだよね」ってことをパティに言ったら、「自分の国に対してなんでそんな酷いこと言うんだよ」って言い返されたんだよね。パティって、アボリジニとトレスアイランドの2つの血を引いている人間で、自分の民族の伝統とかアボリジニとしての威厳とかを伝えられて育ってきたらしいんだよね。だから、自分に対しての誇りとか自信みたいなものを常に持っていたよね。いまもパティが自分たちのアイデンティティを大切にしているのを見て、「あのときの俺の言葉って、どういうことだったんだろう」って考えさせられるんだよね。でも、素直に日本を好きって言えないのには、日本の教育文化とかにある気もしていて、そのあたりのことについて、よくよくさかのぼっていくと、やっぱり戦争って大きかったんだと思うんだよね。第二次世界大戦で軍国主義みたいになって、教育も国のためのものになって、それでも戦争では負けて、「日本はダメだった」っていう意識が受け継がれてきていて。でも、軍国主義の名残なのか、先生は強いとか、上下関係とかはなんとなく残っているよね。それに対して、明治維新の頃の日本人って、もっと生き生きしていたんじゃないかなっていう印象が勝手にあるんだよね。

筆者：スポーツにしても、明治に日本に入ってきたといわれていますが、その当時は、大学の部活動のなかで、エリート層が娯乐的に嗜んでいたとも言われます。スポーツに限ってみても、当時の日本人のかかわりかたは、いまとかなり違っていたんだろうと思います。

山口氏：そうだね。最近のことを考えると、戦争の代わりとしてのスポーツみたいな感じが少し気になっていてさ。この前日本で行われたラグビーのワールドカップ<sup>29)</sup>を見たときに、ノーサイドの精神みたいなのが随所に現れていて、やっぱりラグビー凄いなって思ったんだよね。オールブラックスのメンバーが日本の地域に貢献活動してたりとか、オールブラックスが「お辞儀」をするようになって、それを真似してほかのチームもやり始めたし、試合中に暴力を振るってしまった選手が試合後に相手チームのところに行って謝りに行ったりとかさ、優勝候補だったオールブラックスは負けちゃったけれどもすごく周りに感謝していたりとかさ、ラグビーのカッコよさとかよさとかがものすごく出ていたんだよね。で、そう思っていたなかで、決勝でイギリスが負けた後に、イギリスの選手たちがメダルを受け取らないみたいなことがあって、ちょっとびっくりしたんだよね。あれだけ、勝ち負けを超えたノーサイドの精神が色々と見えていた大会のなかで、最後の最後にイギリスが勝ちに心を奪われている感じがしちゃってさ。そのとき、やっぱり資本主義のこととか考えちゃったんだよね。戦争にしても植民地支配にしても、お金とか資本とか利益とかの追求とイギリスとの歴史的な結び付きを感じちゃったのよ。スポーツでの勝ち／負けに対してのこだわりも、資本主義的なかなって思ったんだよね。だからなにが言いたいかっていうと、戦争とかお金のこととかから来ているなにかの弊害っていうものは、いまの日本の文化にもあって、自分自身が日本を好きになれないことと関係している気がする。「謙遜する」とか、ほんとに要らないって思うんだよね。アスリートの子に「うまかったね」って言っても、「いや、そうでもないですよ」とか言うんだよね。俺としては、「これよかったでしょ?」とか「できましたよ！ここだけはできなかったですけど、でもこれだけはできたんですよ！」とか言ってほしくて、どっちでもないみたいなパターンはやめてくれよって思うんだよね。そういうことばかり言っていると、その人が何者でもなくなっちゃうから。

筆者：そうですね。この手の話は、指導者とか色んなものを含めた問題なんだと思います。僕のなかで印象的だったのは、今回のオリパラをやる

かやらないかみたいな話が出ていた時期に、池江璃花子さんが発言して叩かれていたときがありましたよね。もちろん、ほかにも発言をするアスリートはいました。JOC会長の山下泰裕さんが、「アスリートに発言を求めるのは酷」ということをおっしゃっていて<sup>30)</sup>。山下さんとしては、自分なりのやさしさとか配慮だったのだろうと思うのですが、今日の議論を踏まえると、やっぱりアスリートその人の表現を奪っているなって思うんですね。山下さんの例を挙げましたが、無自覚のうちにアスリートの表現に蓋をしてしまっているようなことは、まだまだ日本にはたくさんあるのだろうと思っています。

山口氏：そう思うよ。そもそもいまの時代は、アスリートがスポーツだけしていればいいって時代では絶対ないからね。アスリートは、ある意味ではインフルエンサーだからさ、彼らの1つ1つの意見ってものすごく大事だと思うし。山下さんの主張は、アスリートが発言することによって叩かれることを守るためだったんだろうと思うけど、でも、そもそも、「周りがなんと言おうと、自分の意見は自分の意見でいい」って思っている社会になっていけば、叩かれようがなんて言われようが気にならないわけだね。「人の意見は人の意見で、そういう見方もあるよね」って思えることも1つの尊重だし。「そういう個性あっていいよね。でも、俺の個性こっちだから」みたいなね。一緒じゃなきゃいけないって思っているからショック受けるんだよ。違うのが当たり前だと気にならないもんね。

筆者：相当長くお付き合いいただいてしまいました。今日はほんとうに面白かったです。バスケットやポポヴィッチのコーチングの話を中心にしてきたつもりでしたが、でも、議論の多くが、「人間」とか「表現」とか「尊重」とか、そういった話題になっていたのが興味深かったです。とはいえ、それらもまた、ポポヴィッチのコーチングやコーチングについて考えなければいけないことを特徴づけているのかもしれませんが。いずれにしても、バスケットボールのコーチングや組織づくりについての議論からそういったキーワードが出てきたということには、なんらかの必然性がありそうですね。

山口氏：やっぱり、俺自身のいまの考えかたの根本はポップだもん。常にポップは、頭のどこかにあるよね。これまで、人を尊敬することなん

てあんまりなかったけど、ポップに対してはリスペクトがあるんだよね。まあ、リスペクトというか、ポップは、人間として目標とする人みたいな感じかな。なによりも彼は、すごい人ではなくて、普通の人なんだっていう意味でね。当たり前のことを当たり前のようにする人だし、なにか特別なことをやっているわけではないんだよね。

筆者：「普通の人」ですか。これまた興味深いキーワードが出てきてしまいました(笑)。残念ではありますが、お時間のご都合もあるかと思えますので、このあたりで終了にしましょう。本日はどうもありがとうございました。

### 3. おわりに

当初の計画では、おおよそ1時間半程度の対話を予定していた。この旨は、山口氏にも事前に伝えておいた。だが、終わってみれば、対話は2時間以上におよぶものとなった。対話の内容も、コーチングの論題に留まることなく、多岐にわたるトピックスへ発展していった。本対話には、多くの剰余が含まれている。本稿は、さまざまな読みかたが可能であるだろうし、そこから生まれる「問い」も多様であってよい。もとより本稿は、そうした議論の広がりを目指すものであった。最後に、筆者が抱いた「問い」を書き記しておきたい。

まず、筆者にとって印象的であったのは、山口氏のトレーニング観である。山口氏は、トレーニングをフィジカルな活動としてのみとらえているのではない。山口氏は、「身体を通じて自分を知る、もしくは、トレーニングってものを通じてその人自身を見つけるきっかけを伝えていくこと」を大切にしている。山口氏にとってトレーニングは、自己理解や自己表現の問題と密接に結びついている。この点において、山口氏のトレーニング観は、哲学的な心身問題に通じているように思える。こうしたトレーニング観は、いわゆる「トレーニング科学」の領域では、ほとんど目にすることはないだろう。また、山口氏によるエビデンスのとらえかたは、実践的に示唆に富むものであったと考える。山口氏は、エビデンスにしたがうことが大切なのではなく、エビデンスとの偏差からその人固有の感覚を理解することが重要であると語っていた。こうした主張を耳にすると、トレーニング科学を自然科学の領野に限定することへ一定の違和感が生じてくる。トレーニングが自己理解や自己表現の問題と結びつくならば、トレーニングに関する「問い」は、人間の運動を数量的に理解してゆくのみならず、身体を通じた人間理解のプロセスの解明にまで及ぶのではないだろうか。それは、すぐれて体育学的<sup>31)</sup>な課題となるは



ずである。山口氏との対話は、「トレーニング(学)」といういとなみに対する問いなおしの視界を開くものであったように思える。

次に印象的であったのは、やはり、ポポヴィッチのコーチングに関する議論である。興味深いことに、彼のコーチングに関する文脈では、具体的なコーチング方法が議題にあげられることはなかった。本対話では、ポポヴィッチの選手たちとの向き合いかたや彼のバスケットボールのとらえかたなどが議論の中心をなしていた。ポポヴィッチのコーチングでは、人として選手と繋がるのが大切にされている。ポポヴィッチと選手たちは、人間同士の信頼関係によって結ばれている印象を受ける。こうしたことの重要性は、容易に了解可能であると推測される。だが、本対話の文脈を踏まえれば、上記のことがらには、一定の慎重さを以って理解されなければならないだろう。「人として選手と繋がること」の背景には、バスケットボールを人生の一部ととらえ、選手の人生そのものを大切にしようとするポポヴィッチの姿勢がある。また、「人として選手と繋がること」が可能になるためには、選手の側の「自己表現」もポイントとなっていたように思える。本対話から導かれたポポヴィッチ像は、カリスマとしてのコーチ像に矮小化されるものではない。ポポヴィッチは、ときに選手たちに謝ったり、選手たちからなにごとかを学び取ったりもする。選手一人ひとりの「自己表現」を真摯に迎え入れるという意味で、ポポヴィッチは、すぐれた「ホスピタリティ」の持ち主であるといえるだろう。こうしたことと関連して、スパーズにおける「信頼関係」は、「交換」の関係に限定されるものではなかったように思える。本対話から仄めかされた「信頼」の概念は、「この人は〇〇をしてくれたから今度は××をしてくれるだろう」というような推論にのみとづくものではない<sup>32)</sup>。それはむしろ、「贈与」の原理と密接にかかわるものであった印象を受ける。見返りをあらかじめ前提とするのではなく、他者の決断に身を賭するような「信頼」のありかたが、本対話からは示唆されていたように感じる。この意味での「信頼」のうえに、チームスポーツにおける化学反応がありうるのではないだろうか。山口氏との対話を経たいま、筆者は、「人として選手と繋がること」や「信頼関係」、「自己表現」や「ホスピタリティ」といったことがらの本質を究明し、そこから「コーチング哲学 (coaching philosophy, philosophy of coaching)」を展開する可能性を看取している。とりわけ、「自己表現」や「ホスピタリティ」といった言葉は、従前の「コーチング哲学 (philosophy of coaching)」の文脈で主題的にあつかわれてこなかった概念であるだろう<sup>33)</sup>。また、「自己表現」や「ホスピタリティ」との関

連から、「人として選手と繋がること」や「信頼関係」の本質を究明してゆく方向性も考えられる。これらのキーワードが時間的な対話の流れのなかから示唆されたことを忘れてはならない。

最後に印象深かった点は、対話の論題が人間の生の基底の問題にまでおよんだことである。対話の終盤では、自給自足やわが国の戦争の歴史、人種的なアイデンティティなど、エコノミー<sup>34,35)</sup>にかかわる問題が議題にあげられた。一見すると、エコノミーの問題は、コーチングと無関係なものであるように思える。「コーチング哲学 (philosophy of coaching)」の文脈で、エコノミーに関する論題が取りあつかわれることはまずない。だが、エコノミーが人間の生を基底から支えるものであり、コーチングが人間と人間とのかかわりにおいて行われるものであるとすれば、コーチングをめぐる「問い」は、エコノミーの問題にまでおよんでよいはずである。エコノミーの視点からコーチングをとらえ返すとき、コーチや選手の生活全般にすることがらも看過し難い論点として浮上してくるだろう。たとえば、家族や友人との関係や居住環境の充実、食べることや飲むことに対する充足感といった論点が「コーチング哲学 (coaching philosophy, philosophy of coaching)」の問題として焦点化されるのである。殊に、コーチが休日返上で部活動に身をささげるようなわが国の状況において、エコノミーに関する論点は、積極的に論究されるべきではないだろうか。エコノミーの観点からすれば、休日の過ごしかたといった点にも、コーチングを充実させるためのヒントが隠されているように思える。

筆者が今回の対話から抱いた「問い」は上記のかぎりではないが、紙幅の都合上、本稿を締めくくるとしたい。上に記したことは、あくまで、現時点における筆者の「問い」である。それは、確定的なものでも、本対話の読みかたを方向づけるものでもない。むしろ、現時点で抱いた「問い」は、時間の経過や心境の変化に伴い、積極的に更新されてゆくべきである。また、読者によっては、本対話の内容を全く異なる角度から理解することもありえるだろう。上に記した「問い」は、暫定的なものにとどまるが、今後の「問い」の更新や読者の「問い」の多様性を測るための基準として少なからぬ意義を持つはずである。本対話が現場のコーチの「コーチング哲学 (coaching philosophy)」や学問としての「コーチング哲学 (philosophy of coaching)」へ新たな視界を用意するものとなりうるならば、本稿が実践した「コーチング哲学 (philosophizing on coaching in dialogue)」は、有意味なものであったとってよいだろう。

## 注

- 1) 本稿において「問い」とは、「ことの意味」を問うを意味する(和辻, 2007, p. 185)。したがって、「問い」は、観念的な概念によって定義づけられるものではなく、「問うこと」という実践的な行為によって定義づけられる。「問い」には、論点そのものを発見することやものごとの本質を探究すること、ひいては、問題の所在を探ることなどが含まれる。ゆえに、本稿が「『問い』を生成する」ことを標榜するとき、そうした行為(こと)を喚起することが企図されている。なお、そこでの「問い」の主体は、筆者でも読者でもありうることを付言しておく。
- 2) なお、この期間のうちには、サンアントニオ・スパーズの傘下にあるオースティン・トロズでのキャリアも含まれている。詳細は、以下に記述する対話の内容を参照されたい。
- 3) 本節で確認してきたとおり、本稿における対話は、コーチ(経験者)とのそれではない。あくまでそれは、スパーズでアスレティックトレーナーを経験した山口氏との対話である。もっとも、この点は、「コーチング哲学(philosophizing on coaching in dialogue)」の遂行においてさしあたり問題ではない。「コーチング哲学(philosophizing on coaching in dialogue)」のねらいは、研究者や指導者、トレーナー、マネージャーといった立場性を尊重しつつも、そうした立場の垣根を超えて、コーチングについて哲学することにあるからである。但し、スパーズのチーム文化やポポヴィッチのコーチングに関する山口氏の語りは——つまり、個々の出来事や事実に関する氏の語りは——アスレティックトレーナーとしての目線や立場が影響している可能性があることを留意しておく必要があるだろう。
- 4) こうした言表は、管見のかぎり、「コーチング哲学」の領野では見あたらない。だが、体育学、とりわけ発育発達学の研究者である野井(2016, p. 26)の主張には、共通する問題意識を看取することができる。野井(2016)は、「3つの“実”」にもとづき研究を遂行することが肝要であると主張する。「3つの“実”」とは、「実感」を収集するための研究」「実態」を把握するための研究」「実践」を検証するための研究」を指す。とりわけ、「実感」を収集するための研究は、「問題を発見する段階」であるとされ、この研究段階では、「保育・教育現場の先生方や子育て中の保護者が抱く“実感”が有効である」とされる(野井, 2016, pp. 26-27)。彼が「“実感”を収集するための研究」を重んじる理由は、「健康診断やスポーツテストの結果だけでは発見できない問題もキャッチできる」(野井, 2016, p. 27)からであり、「実践的な側面も持ち備える体育学研究、発育発達研究が見当違いの方向に進まない」(野井, 2016, p. 31)ようにするためである。一連の野井(2016)の主張は、体育学・発育発達学について論じられたものであったが、「コーチング哲学」をとらえ返すうえでも示唆に富むものと考えられる。
- 5) もちろん、本稿の内容は、分析の対象とすることも可能であるだろうし、山口大輔氏やスパーズに関する情報と

して読むことも可能である。

- 6) 「問い」をめぐる以上の論点に関しては、納富(2017, pp. 267-299)の論考に詳しい。納富(2017)の論考は、ソクラテスの哲学観を「無知の知」と解することの問題点を考証し、哲学的探究の本質を考察したものである。
- 7) サンアントニオ・スパーズとオースティン・トロズとの関係を整理しておく。トロズは、NBA デベロップメント・リーグ(現名称はNBA ゲータレード・リーグ)に属するバスケットボールチームであるが、スパーズの傘下にある組織でもある。トロズの運営母体は、あくまでスパーズである。山口氏のキャリアは、トロズから始まるが、あくまでそれは、スパーズの組織で働いていたということである。なお、オースティン・トロズは、のちにオースティン・スパーズにチーム名を変更するが、本稿では山口氏が所属していた頃の名称を尊重し、トロズと記述する。
- 8) スパーズは、当時、さまざまな国籍の選手が所属するチームとして知られており、「多国籍チーム」と形容されることがしばしばあった。
- 9) 「ダイスさん」とは、山口氏の愛称である。筆者は、普段より山口氏のことを「ダイスさん」と呼んでいることから、本対話でもこの呼称を用いている。
- 10) 本稿では、ポポヴィッチのコーチングや人間性に関する話題が数多く登場する。本対話における山口氏の発言では、ポポヴィッチではなく、愛称である「ポップ」という呼び名が用いられているが、筆者が彼を指示するときは、「ポポヴィッチ」という表記を用いる。
- 11) スパーズと同じく、NBAのチーム。このファイナルの当時、ヒートは、レブロン・ジェームスやドウェイン・ウェイド、クリス・ボッシュといったスタープレイヤーを擁するスーパーチームであった。
- 12) NBAは、レギュラーシーズンを終えたのちに、ウェスタンカンファレンスとイースタンカンファレンスの上位8チーム(計16チーム)がトーナメントを行い(プレーオフ)、最後に、各カンファレンスの優勝チームがリーグ全体の優勝を競って対戦する。ここでは、この優勝決定戦をファイナルと呼んでいる。
- 13) 1997年から2016年までスパーズでプレーした選手。彼がスパーズでプレーし始めた時期は、ポポヴィッチがヘッドコーチに着任したのとはほとんど同時期である。のちに話題にあがるが、彼とポポヴィッチとの関係性は、スパーズの組織を理解するうえで重要である。
- 14) 当該の試合は、東京2020オリンピック競技大会(実際に開催されたのは2021年)が開催される直前に行われた国際親善マッチを指している。ポポヴィッチは、アメリカ代表のヘッドコーチを務めていたが、この試合では、87-90でアメリカ代表がナイジェリア代表に敗北し、「歴史的敗北」と形容されることもあった(柴田健, 2021)。なお、のちに議題にあがっているが、東京2020オリンピック競技大会では、アメリカ代表が優勝を収め、金メダルを獲得している。
- 15) ここでは、以下の研究を念頭に置いている。久保正秋(2010)体育・スポーツの哲学的見方。東海大学出版: 神奈川, pp. 206-211。/長谷川憲(2018)自己犠牲的チームプレイにおける選手の主体性: Sartreを手がかり

- に、体育・スポーツ哲学研究, 40(1): 63-77.
- 16) ここでは、パトリック・サミー・ミルズ (Patrick Sammy Mills) のことが議題にあがっている。ミルズは、2012年からスパーズでプレーしてきたオーストラリア出身の選手であるが、東京2020オリンピック競技大会の期間中に他チームへ移籍することが決定した。なお、ミルズに関する議論は、本稿の終盤でも取りあげられている。彼の呼称は、山口氏の発言においては、愛称である「パティ」と記載している。
  - 17) たとえば、矢野 (2008) の研究を参照。
  - 18) 日本の元プロ・バスケットボール選手。現在は、バスケットボールスクールであるWACH&Cアカデミーの代表を務めており、子どもたちにバスケットボールを指導している。
  - 19) アメリカ合衆国出身のNBA選手。彼は、オリンピックや世界選手権での優勝経験を持ち、2016年には、レブロン・ジェームズやカイリー・アービングとともに、NBAでの優勝も果たしている。なお、以下に取りあげるように、彼は、2018年にパニック障害に見舞われたことを告白している (NBA.com, 2018)。
  - 20) 東京2020オリンピック競技大会における田中希実氏の発言が議題にあがっている。彼女は、女子1500メートルで日本新記録を打ち出し、準決勝進出を決めた。このレースののちに彼女は、「日本記録を出せば準決勝に行けると思っていたので、目標通りのタイムで準決勝に行けて良かった」と述べている (日刊スポーツ, 2021)。
  - 21) ブルックリン・ネッツに所属するNBA選手である。
  - 22) 村本宗太郎 (2016) 学校運動部活動時の「体罰」判例に見る体罰の特徴とその要因に関する研究。日本スポーツ法学会年報, 23: 157.
  - 23) ウィリアム・アンソニー・パーカー・ジュニア (William Anthony Parker, Jr.) のこと。2001年から2018年までスパーズでプレーしたフランス出身の選手である。本稿では、山口氏の発言の際には、同選手の呼称を「トニー」と表記している。
  - 24) エマニュエル・ダヴィド・ジノビリ・マッカリ (Emanuel David Ginobili Maccari) のこと。2002年から2018年までスパーズでプレーしたアルゼンチン出身の選手である。本稿では、山口氏の発言の際には、同選手の呼称を「マヌ」と表記している。これ以降の議論からわかるとおり、当時のスパーズは、プレーの面でも精神的な面でも、ティム・ダンカン、トニー・パーカー、マヌ・ジノビリの3名が中心的な役割を果たしていた。なお、それぞれがスパーズに入団した順番を時系列に並べると、ティム・ダンカン (1997年～) → トニー・パーカー (2001年～) → マヌ・ジノビリ (2002年～) ということになる。
  - 25) 事態の顛末を簡単にまとめておく。結論から言えば、スパーズは、クワイ・レナードを獲得する代わりに、ジョージ・ヒルをインディアナ・ペイサーズへ放出する決断を下した。ジョージ・ヒルは、2008年から2011年までスパーズでプレーした選手である。彼は、バックアップのポイント・ガードとして成長し、チームからの信頼を着実に得ていた。対して、クワイ・レナードは、ウイングスパンなどの身体的な素質に恵まれていたものの、卓越したスキルセットを持つプレーヤーではなかった。彼は、いわゆる「粗削り」なプレーヤーだったのである。但し、彼は、謙虚な姿勢とハングリー精神を持っていたとも評価されており、少なくともスパーズにとっては、磨けば光る逸材であった (実際に彼は、スパーズに在籍していた2013-2014シーズンにはファイナルMVPを獲得し、トロント・ラプターズでプレーした2018-2019シーズンでも同タイトルを獲得している)。つまり、当時のスパーズは、堅実なジョージ・ヒルを残留させるか、ポテンシャルを感じさせるクワイ・レナードを獲得するかの決断に迫られていたのである。このトレードの背景には、前年度のチーム事情も関係している。トレードが成立する1年前のシーズン (2010-2011シーズン) には、スパーズが61勝21敗という圧倒的なシーズン成績を残し、第1シードでプレーオフを迎えた。ところが、このプレーオフの初戦でスパーズは、第8シードのメンフィス・グリズリーズに敗退を喫する。トレードの決断を下さなければならなかったこの時期は、前シーズンの敗北を背景にして、なんらかのテコ入れが求められていた時期でもあった (Geoffreys, 2020, 61-73)。この文脈のなかで敢行されたのが、当該のトレードである。
  - 26) 松田太希 (2016) 運動部活動における体罰の意味論。体育学研究, 61(2): 407-420.
  - 27) 高尾尚平 (2019) スポーツ指導と暴力克服の倫理: 他者としての選手との関係をめぐって。体育・スポーツ哲学研究, 41(2): 115-132.
  - 28) ボリス・ババカル・ディアウ＝リフィオー (Boris Babacar Diaw-Riffiod) のこと。2012年から2016年までスパーズに在籍していたフランス出身の選手であり、スパーズの優勝にも貢献している。当該の議論からもわかるとおり、彼の体型は、スティックにシェイプされたものではない。
  - 29) ここでは、ラグビーワールドカップ2019日本大会におけるイングランド代表のふるまいが話題にあげられている。同大会の決勝でイングランドは、南アフリカに敗れ、銀メダルを獲得した。表彰式では、銀メダルを首にかけられることを拒否する選手や首にかけられたメダルを外す選手などが散見された。こうしたイングランドの代表選手の態度は、海外メディアでも批判的に報じられた (YAHOO ニュース JAPAN, 2019)。
  - 30) JOCの山下会長が登壇した2021年2月の記者会見が念頭にある。この時期には、森喜朗氏の女性蔑視とも読み取れる発言が世間の注目を集めたほか、東京2020オリンピック競技大会の開催是非が問われていた。また、この時期には、アスリートの発言に注目が集まっていた。こうした趨勢に対して、山下氏は、「アスリートが自分のために五輪をやってほしいと思われる可能性がある。今の状況でアスリートに発言を求めるのは酷だと思う」と自身の見解を示した (朝日新聞 DIGITAL, 2021)。
  - 31) ここでは、林 (2020) による体育学の理解が念頭にある。林 (2020, p. 620) は、「学問の手續きに拠り身体的・社会的側面より人間の幸福を採求するのがTaiikuの研究であり、Taiikuの学として、身体運動を通じた幸福に資する知恵を集成する学問が体育学である」と論じている。
  - 32) 過去の反復可能性から「信頼」を理解することの問題性

- については、熊野（2003, pp. 93-114）の論考が参考になるだろう。熊野（2003, p. 113）は、和辻倫理学を批判的に検討し、過去の集積から未来を規定する「信頼」の概念が「過ぎ去ってゆくもの、過ぎ去ったもの、回帰しないものへの視線」を覆い隠すと指摘している。
- 33) なお、佐良土（2021, pp. 209-212）の研究では、「ホスピタリティ」という概念こそ用いられていないものの、思慮あるコーチの特徴として「傾聴」が取りあげられている。佐良土（2020）が指摘する「傾聴」は、「ホスピタリティ」との類似性があるように思えるが、両者の共通性と差異については、いっそうの考察を要するだろう。その意味で、コーチングにおける「傾聴」と「ホスピタリティ」との関連性については、1つの論題となりうる。
- 34) ここでは、エコノミーの概念を経済的なものに限定せず、「人間の生の基底をささえる諸活動の全体、その組織と秩序」（熊野、2003, p. 222）の意味で用いている。エコノミーの具体例としては、「住むこと」や「食べること」、「働くこと」などがあげられる。
- 35) エコノミーに関しては、E. レヴィナス（2005〈1961〉）によって展開された現象学的考察が示唆に富むものと考えられる。レヴィナス（2005, pp. 208-379〈1961, pp. 81-158〉）は、『全体性と無限』の第二部「内部性とエコノミー」において、「住まうこと」や「食べること」、「働くこと」などに着目し、人間の生を基底から成り立たせるエレメントについて考察している。
- 文献**
- 1) 朝日新聞 DIGITAL (2021)「今アスリートに発言を求めるとは酷」JOC 山下会長。 <https://www.asahi.com/articles/ASP295TCQP29UTQP01R.html> (参照日:2021年9月30日)
  - 2) 東 浩紀 (2020) 新対話篇。ゲンロン：東京。
  - 3) NBA.com (2018) Kevin Love says he suffered panic attack during game this season. <https://www.nba.com/news/kevin-love-cleveland-cavaliers-reveals-suffered-panic-attack-vs-atlanta-hawks> (参照日：2021年9月30日)
  - 4) Fry, J. P. (2015) Philosophical Approaches to Coaching. In: Routledge Handbook of the Philosophy of Sport. M. McNamee and W J. Morgan (Eds.). Routledge: London and New York.
  - 5) Geoffreys, C. (2020) Gregg Popovich: The Inspiring Life and leadership Lessons of One of Basketball's Greatest Coaches. Calvintir Books, LLC: Florida.
  - 6) 長谷川 憲 (2018) 自己犠牲的チームプレイにおける選手の主体性：Sartreを手がかりに。体育・スポーツ哲学研究, 40(1)：63-77.
  - 7) 林 洋輔 (2020) 学問における「体育 Taiiku」概念：『体育学研究』総説論文の結集に観るその創出と変遷。体育学研究, 65：607-626.
  - 8) K. ヤスバース著：草薙正夫訳（1954）哲学入門。新潮文庫：東京。
  - 9) Jaspers, K. (1971) Einführung in die Philosophie. PIPER: München/Berlin.
  - 10) 片岡暁夫（1987）体育原理とはなにか。体育原理講義。中村敏雄・高橋健夫（編）。大修館書店：東京。
  - 11) 久保正秋（2010）体育・スポーツの哲学的見方。東海大学出版：神奈川。
  - 12) 熊野純彦（2003）差異と隔たり 他なるものへの倫理。岩波書店：東京。
  - 13) レヴィナス著：熊野純彦訳（2005）全体性と無限（上）。岩波書店：東京
  - 14) Levinas, E. (1961) Totalité et Infini: Essai sur l'extériorité. Martinus Nijhoff: The Hague.
  - 15) 松田太希（2016）運動部活動における体罰の意味論。体育学研究, 61(2)：407-420.
  - 16) 村本宗太郎（2016）学校運動部活動時の「体罰」判例に見る体罰の特徴とその要因に関する研究。日本スポーツ法学会年報, 23：136-161.
  - 17) 日刊スポーツ（2021）女子1500田中希実「目標通りのタイム」全体4位、日本新で準決勝進出。 <https://www.nikkansports.com/olympic/tokyo2020/athletics/news/202108020000224.html>（参照日：2021年9月30日）
  - ・納富信留（2017）哲学の誕生 ソクラテスとは何者か。筑摩書房：東京。
  - 18) 野家啓一（2013）科学の解釈学。講談社学術文庫：東京。
  - 19) 野井真吾（2016）保育・教育現場等とのコラボレーションからみた発育発達研究の課題。子どもと発育発達, 14(1)：26-32.
  - 20) 隠岐さやか（2018）文系と理系はなぜ分かれたのか。星海社：東京。
  - 21) 佐良土茂樹（2018）「コーチング哲学」の基礎づけ。体育学研究, 63(2)：547-562.
  - 22) 佐良土茂樹（2021）コーチングの哲学 スポーツと美德。青土社：東京。
  - 23) 柴田 健（2021）男子バスケットアメリカ代表、ナイジェリア代表に歴史的敗北。 [https://www.basketball-zine.com/0710\\_usavngr](https://www.basketball-zine.com/0710_usavngr)（参照日：2021年9月30日）
  - 24) 高尾尚平（2019）スポーツ指導と暴力克服の倫理：他者としての選手との関係をめぐって。体育・スポーツ哲学研究, 41(2)：115-132.
  - 25) 渡邊二郎（1998）哲学。岩波 哲学・思想事典。廣松渉・子安信邦ほか（編集）。岩波書店：東京。
  - 26) 鷺田清一（2014）哲学の使い方。岩波書店：東京。
  - 27) 鷺田清一（2015）「聴く」こと之力 臨床哲学試論。筑摩書房：東京。
  - 28) 和辻哲郎（2007）人間の学としての倫理学。岩波書店：東京。
  - 29) 矢野智司（2008）贈与と交換の教育学：漱石、賢治と純粹贈与のレッスン。東京大学出版：東京。
  - 30) Yahoo ニュース Japan（2019）海外メディアはイングラント銀メダル拒否事件を一斉報道。批判的声伝える「不愉快な敗者」「敬意に欠く行為」。 <https://news.yahoo.co.jp/articles/0680df7e0ae25b596d88925bc10cefee0411df7c?page=2>（参照日：2021年9月30日）

〈連絡先〉

著者名：高尾尚平

住 所：東京都世田谷区深沢 7-1-1

所 属：日本体育大学

E-mail アドレス：s-takao@nittai.ac.jp